新制國語讀本

修訂版

卷五

375.9
To.10
資料室

41654
教科書文庫
4
810
41-1935
20000
63570

資料室

昭和十年十二月十日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用
實業學校國語科用

學習院教授 東條操編

新制國語讀本 修訂版 卷五

株式會社 三省堂

広島大学 教 63570 図書

3759
T010

本居宣長　(第二十五課参照)

巻五　目次

一　櫻と我が國民性　深作安文　一
二　春宵漫歩　夏目漱石　九
三　朝鮮の四季　遲塚麗水　一六
四　晩春の別離　島崎藤村　二四
五　新綠の野　安倍能成　三二
六　かゞやく露　生田春月　三八
七　人臣の道　北畠親房　四三

八　松の下露　（太平記）　四八
九　吉野の行宮　（新葉集）　五四
一〇　試煉　吉田絃二郎　五六
一一　希望の海　川路柳虹　六〇
一二　ハンニバル　矢野龍溪　六二
一三　爲朝の弓勢　（保元物語）　七〇
一四　待賢門の戰　（平治物語）　七七
一五　男性美　笹川臨風　八五
一六　上高地　田部重治　九〇
一七　夏の雲　國富信一　一〇二

一八　水の風趣　大町桂月　一一〇
一九　生の味　相馬御風　一一六
二〇　道學ぶ人　松平定信　一二一
二一　須賀の荒野　（諸家）　一二六
二二　友に與ふ　高山樗牛　一二九
二三　忘れ難き日　姉崎嘲風　一三三
二四　感化の力　黑岩涙香　一三七
二五　師の説　本居宣長　一四〇
　一　新たなる説を出すこと　一四〇
　二　師の説になづまざること　一四一

三 わがをしへ子にいましめおくやう 一四三
四 一むきにかたよること 一四四
二六 本居翁の遺蹟 芳賀矢一 一四六
二七 國語の愛護 五十嵐力 一五三
二八 敬神 杉浦重剛 一五九

—目次終—

新制國語讀本 修訂版 巻五

一 櫻と我が國民性

深作安文

深作安文 文學博士。東京帝國大學教授。茨城縣の人。明治八年生。

一

櫻花には梅花の清楚はない。薔薇の濃艷はない。桃花の豐麗、牡丹の富貴もない。海棠の妖艷、菊の高逸もない。けれども、その咲きも殘らず散りも初めぬ爛漫たる樹頭に、鮮やかに朝日の照り添ふ趣は、げに百花の王たるに恥ぢないのである。長堤十里、若しくは全山雲か霞か、人をして思はず快哉を叫ばしめる壯觀は、實に櫻に限るのである。朧月夜の櫻花は、人をして恍惚として花神に

錯落　八幡公　源義家。

接するの思ひあらしめる。巨松の間に錯落する櫻花の、松は愈〻翠に、花は愈〻白いのは、またとない眺めである。その他、春雨に濕ふもの、夕陽に映ずるもの、高閣に配するもの、池水に臨むもの、名刹の花、古都の花、何れも見る者をして、我が國で花といふ名が全く櫻花の獨占する所となつた事の、更に異しむに足らぬ事を思はしめるのである。

二

若し以上を櫻の自然美と言ふならば、これが歴史美もまた一入の趣をもつてゐる。「花は櫻木、人は武士」櫻花は花中の花であつて、武士は人中の人である。昔から櫻花と武士とはその因縁甚だ深いものがある。勿來關外、馬上槊を横たへて紛々たる落花に逝く春を惜しんだのは八幡公である。一たび鎮西へ落ち延びよう

平薩州　薩摩守平忠度。壽永三年(一一八四)一の谷で戰死、年四十一。

俊成卿　藤原俊成。元久元年(一二〇四)歿、年九十一。

千載集　二十卷。後白河法皇の院宣によつて、文治三年(一一八七)藤原俊成が撰した。

「さゝなみや」云々　「さゝなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな。」

行宮の櫻樹　美作國(岡山縣)苫田郡院庄に在つた後醍醐天皇の行在所。

一詩を題し云々　「天莫空勾踐。時非無范蠡。」

として淀より京に引返し、師の門を叩いて歌集を託し、せめて一首を勅撰集に留める事が出來れば、たとひ死んでも生きてゐると同じであると言つたのは平薩州である。俊成卿は感涙を流してこれを受納し、千載集を撰するに當つて、よみ人知らずとして、かの「さゝなみや」の絶唱を採錄したのである。深夜竊に行宮の櫻樹を削つて一詩を題し、人臣の至誠を雲上に奏して叡慮を安んじ奉つたのは備後三郎である。若しそれ吉野朝と櫻花との關係に至つては、千載の下、人をして言ふべからざる感慨にその袖を絞らしめる。

兒島高德

百敷の云々 「百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮しつ。」（新古今集）

夜嵐や云々 園女の句。

木の下に云々 芭蕉の句。

年々歳々云々 「年々歳々花相似。歳々年々人不レ同。」（唐の劉廷芝）

三

櫻花の季節はいはゆる春風駘蕩、寒からず暑からず、一年中の最好季節である。我が國民は上下を問はず、貧富を論ぜず、春服を纏ひ、嬉々として行樂を恣にする。かの「百敷の大宮人」は、殿上人の櫻狩を詠じたものであつて、春の日の長閑さが目の前に見える心地がする。「夜嵐や太閤樣の櫻狩」は、豪奢を極めた豊太閤の醍醐の花見を詠んだもので、「木の下に汁もなますも櫻かな」は、江戸時代の花見を描いたものである。

花神の殊寵を蒙る我が國民の如きは、眞に世界にその類例を見ない所である。言ふまでもなく、年々歳々花は相等しいけれども、これを見る者は年毎にその齢を加へつゝあるのである。然るに一たびこの花に對すれば、何人も老の將に至らんとするを忘れる

靈感に觸れる

東方君子國

新宿御苑 東京市四谷區新宿に在る。

のは、誠に不可思議の事ではあるまいか。そは蓋し、その刹那美感に打たれ、靈感に觸れて花や人、人や花、花と人とが渾然融合し去るが爲であらう。これに由つてこれを觀れば、櫻花は東方君子國の精華であつて、正に我が民族の趣味精神の象徵である。古來櫻花が我が國民性を陶冶する上に偉大な力のあつた事は、これを想像するに難くない。觀光の爲、外人の我が國に來る者は、櫻花の季節に最も多い。さうして彼等は畏くも觀櫻の御宴に、新宿御苑に御招待を蒙るのを以て無上の光榮とし、かくして純日本趣味を心から味解するのである。

四

櫻花と我が國民性とを對照して見ると、驚く程の類似若しくは一致を見出すのである。櫻花は陽春三月に開いて、至つて陽氣で

凝滯

ある。世間的·樂天的である。梅の隱逸はこれをこの花に認める事は出來ない。況して蓮の厭世をやである。我が國民性も亦然りである。由來我が國民は快活であつて、少しも厭世的傾向がなく、極めて世間的·樂天的である。これその一。

櫻花の色は所謂櫻色であつて、淡紅であり、澹泊である。菫の濃紺もなく、ダリヤの深紅もない。我が國民性も亦その通りである。我が國民は古來澹泊を愛し、正直を重んじて、物に執着がなく、事に凝滯がない。儒教が入り、佛教が入り、西洋文化が入つて、容易に我が文化に同化されたのも、一にこれが爲である。これその二。

櫻花は密集して開くものであつて、極めて賑やかである。これを眺めるには、例へば吉野の一目千本といふ樣に集團的なものがよい。唯一本の櫻、活花の櫻、盆栽の櫻はさまで人目をひかない。全山皆櫻、滿堤悉く花であつて、始めて眞の櫻花美を窺ひ知る事が

具現

出來る。大和民族もまた然りである。もと家族制を以て立つた國だけあつて、國家的觀念が甚だ強く、國民的結合が極めて堅い。その外國と難を構ふるに當つて、愈その一致團結を堅くする。これその三。

五

我が國の櫻は、花はあるけれども、果實は殆ど言ふに足らぬ。唯その花は壯美秀麗、遙に百花に抽でて、誠に理想的の花である。我が國民、殊に武士は頗るこれに似てゐる。その純忠·勇敢·淸廉·質素等の諸美德は、一定の主義·理想から導き出され、この主義を實行し、この理想を實現せんとして彼等は努力し、死もまたこれを辭せぬ。櫻花が大和魂の具現、武士道の表彰として武士の理想を寓する所となつたのは、全くこれが爲である。これその四。

神州正大の靈氣

櫻花は忽ち開き、忽ち散る。開落共に慌しい。一日見る事を怠ると白雪滿地、しかも新緑は已に樹頭に上るのである。その散り際は極めて美しく、極めて澹泊で、微塵も未練がましい所がない。櫻花が武士の精神と相通ずる所のあるのは、一にはこれが爲である。武士の生命とする所は犠牲的精神にある。名を惜しんで命を惜しまず、君の馬前に討死するを以て無二の本懐となし、無上の光榮とするのである。これその五。

これを要するに、櫻花美と武士美とは二にして一、一にして二、神州正大の靈氣が凝つてこの花となり、この人となつたものと謂ふべきであらう。

（倫理と國民道德）

夏目漱石　名は金之助。英文學者。小說家。東京市の人。大正五年歿、年五十。

觀海寺　假設の寺。

二 春宵漫歩

夏目漱石

山里の朧月夜に乘じてそゞろ歩く。觀海寺の石段を登りながら「仰數春星一二三。」といふ句を得た。余は別に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出て、足の向く所にまかせてぶら〳〵するうち、つい此の石段の下に出た。しばらく「不許葷酒入山門。」といふ石を撫でて立つて居たが、急に嬉しくなつて登り出したのである。

石段を登るにも、骨を折つては登らない。骨が折れる位なら、すぐ引返す。一段登つて佇むとき、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に遮られて、三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寐ぼけた空の奥から小さい星がしきりに瞬き

鎌倉五山　建長寺、圓覺寺、淨智寺、淨妙寺、壽福寺。

をする。句になると思つて又登る。かくして余はたうとう上まで登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊びに行つて、所謂五山なるものをぐる〳〵尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭(たつちゆう)であつたらう、やはりこんな風に石段をのそり〳〵と登つて行くと、門内から黄な法衣を着た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下りる。すれ違つた時、坊主が鋭い聲で「何處へ御出でなさる。」と問うた。余は只「境内を拜見に。」と答へて同時に足をとめたら、坊主は直ちに「何もありませんぞ。」と言ひ捨てて、すた〳〵と下りて行つた。あまり洒落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭をふり立てふり立て、遂に姿を杉の間に隱した。其の間かつて一度もふり返りはしない。成程禪僧は面白い、きび〳〵して居るなと、のつそり山

門を這入つて見ると、廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるでない。余は其の時に心から嬉しく感じた。世の中にこんな洒落な人があつて、こんな洒落に人を取扱つてくれたかと思ふと、何となく、氣分が晴々した。禪を心得て居たからといふ譯ではない。禪のぜの字も未だに知らぬ。唯あの鉢の開いた坊主の所作が氣に入つたのである。

かうやつて美しい春の夜に、何等の方針も立てずに歩いてゐるのは、實際高尚だ。興來れば、興來るを以て方針とする。興去れば、興去るを以て方針とする。句を得れば、得た所に方針が立つ。得なければ、得ない所に方針が立つ。しかも誰の迷惑にもならない。「仰(ギ)數(フ)春星一二三。」の句を得て、石磴を登り盡した時、朧に光る春の海が帶の如くに見えた。絶句は纏める氣にならなくなつた。卽座にやめにする。山門を入る。

岡躑躅

又平

大津の住人。浮世又平といつて戲畫をよくした。奴・若衆に鷹、金太郎に熊、鬼の念佛などの類が多い。

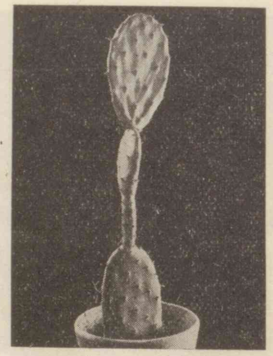
石をたゝんで庫裡に通ずる一筋道の右側は、岡躑躅の生垣で、垣の向うは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽に光る。數萬の甍に數萬の月が落ちた樣だと見上げる。何處やらで鳩の聲がしきりにする。棟の下にでも居るらしい。氣のせいか、

鬼の念佛

廂のあたりに白いものが、點々見える、糞かも知れぬ。雨垂落の處に妙な影が一列に並んでゐる。木とも見えぬ。草では無論ない。感じからいふと、又平のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで、一列に行儀よく並んで踊つてゐる。其の影が又本堂の端から端まで一列に

行儀よく並んで踊つてゐる。朧夜にそゝのかされて、鉦も撞木も奉加帳も打捨てて誘ひ合せるや否や、此の山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな覇王樹(さぼてん)である。

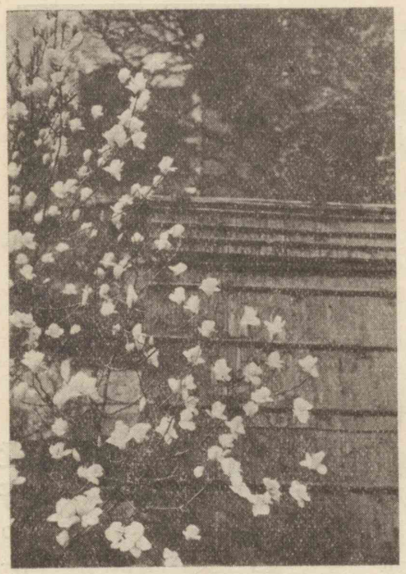


覇王樹

高さは七八尺もあらう、絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ〱と繼ぎ合せたやうに見える。あの杓子が幾つ繋がつたらお仕舞になるのかわからない。今夜のうちにも廂を突き破つて屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來るときには、何でも不意にどこからか出て來て、びしやりと飛びつくにちがひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、其の小杓子が長い年月のうちにだん〱大きくなるやうには思はれない。杓子と杓子の連續が如何にも

突飛である。こんな滑稽な樹は世の中にたんとあるまい。しかも澄したものだ。

石甃（いしだたみ）を行き盡して左へ折れると庫裡へ出る。庫裡の前に大きな木蓮がある。殆ど一抱もあらう。高さは庫裡の屋根を抜いてゐる。見上げると頭の上は枝である。枝の上も亦枝である。さうして枝の重なり合つた上が月である。普通枝があゝ重なると、下から空は見えぬ。花があればなほ見えぬ。木蓮の枝はいくら重なつても、枝と枝の間はほがらかに隙いてゐる。木蓮は樹下に立つ人の眼を亂す程の細い枝を徒らには張らぬ。花さへ明らか



木蓮

である。此のはるかなる下から見上げても、一輪の花は、はつきりと一輪に見える。其の一輪がどこ迄むらがつて、どこ迄咲いてゐるかも分らぬ。それにもかゝはらず一輪は遂に一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。徒らに白いのは寒過ぎる。專らに白いのは殊更に人の眼を奪ふ巧が見える。木蓮の色はそれでない。極度の白さを避けて、暖か味のある淡黄におくゆかしくも自らを卑下してゐる。余は石甃の上に立つて、此のおとなしい花が累々とどこ迄も空裏にはびこる樣を見上げて、暫く茫然としてゐた。眼に落つるのは花ばかりである。葉は一枚もない。

　木蓮の花ばかりなる空を瞻（み）る

といふ句を得た。どこやらで鳩がやさしく鳴きあつてゐる。

（草　枕）

遲塚麗水 名は金太郎。文章家。靜岡縣の人。明治元年生。

三 朝鮮の四季

遲塚麗水

朝鮮の春は、李の花でもなく、杏の花でもなく、梨の花でも、桃の花でもなく、無論櫻の花でもない。朗らかに明るい鬱金の花をもつ連翹(げう)こそは、げに朝鮮の春を象徴する花である。京城なる李王家祕苑はいふまでもなく、通邑大都の門巷籬落、そこに黃金の色麗かな連翹の盈々たる細條、輕く軟風に吹き靡いて、嫩き春の光に陶醉するやうな風情に見えることによつて、始めて春が來たといふ心を催させる。この國ではこの花を迎春花といふ。正しくその名にふさはしい。俗間ではケーナリと呼ぶ、その花の色が金絲雀に似てゐるので、しか呼ばれてゐるのであらう。金絲雀は德川幕府の頃朝鮮の信使が携へ還つたものである。土俗、この花と葉とを胡麻油に漬けて、腫瘡や毒蟲にさゝれた時に、塗抹して奇效がある

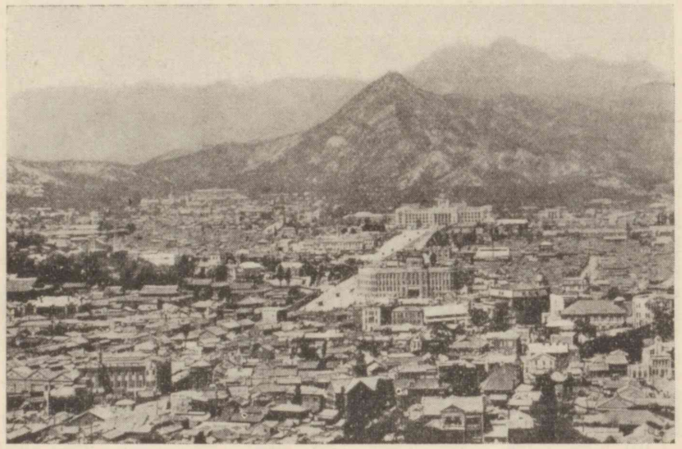
薰風

嘯嗷

三十餘年前云々 明治二十七年。

扶疎

と傳へてゐる。



京城

朝鮮の夏は正に白楊(ポプラ)の夏である。水村山郭、處として丈け高き白楊の、薰風に嘯嗷してゐるのを見ないことはない。枝に鵲の巢を藏してゐるなどは、詩趣あり又畫趣ありといふべきである。私の始めて朝鮮に渡航したのは、三十餘年前、征淸役に從軍した時である。何處へ行つても童山禿丘、絕えて樹らしい樹に逢着することはなかつたが、今來て見れば、到る處翠皐蒼丘、扶疎たる松の林さへ、その樹の旣に拱するに餘りあるを見る。その白楊の殊に

金風

多き事は、この樹の成育、他の木に比すれば最も速に、五年にして屋根の垂木となすに足り、十年にして棟梁となすに堪ふるに見て、併合當初の有司は特にこの木の栽植を奨勵したものであらうと思はれる。

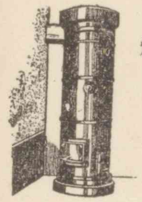
朝鮮の農家

秋の朝鮮は、正に蕃椒の秋と云ふべきである。金風郊墟に入るの時、一度城外におとづれると、村家の草葺屋根の上、殷紅、火よりもあかいこの蕃椒の一面に並べ乾されてあるを見る。支那人が韮・大蒜を嗜むがごとく、朝鮮人は更に尤も蕃椒を嗜む。料理にも香の物にも、この物なければ旨しとしない。落日、山

象徴

にあり、反照雲を爛らす時、水村山郭、一様農家の屋根に乾されたこの蕃椒の紅酣し、硃燃ゆるの光景は、誠に綺麗な眺めである。內地には昔、この物なく、この物あるは豐公の征韓役後より始まるといふ。正しく出征の武士が、その種子を燧石袋の中に收めて持還つたものであらう。されば これを唐辛といひ、更に又高麗胡椒ともいふ。昔、內地の飛脚が深雪のうちを行く時、この物を足袋のうちに入れて凍傷を防いだといふくらゐ、烈寒の地に生を寄せてゐる人たちは、この物を食うて寒氣を攘ふといふ自然の要求から、その嗜好を成したのであらうと思はれる。

明治節時分になると麥酒が凍つて壜が破裂するといふほど寒威の猛烈な朝鮮には、冬を象徴する何物をも持たないことは心寂しい。强ひてこれありとすれば、彼の溫突（ヲンドル）である。李王家の宮殿は勿論、庶民の家にも必ずあつて、冬眠の人に煦々の春を輸すので

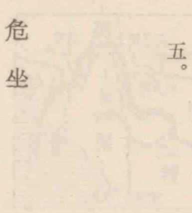


ペーチカ　ロシア式の煖爐。

ある。家の床はすべて泥土で築造される。その床を作らうとする當初から、螺線型に又山路形に、若しくは巴様に、三升形に、古來からの傳統や、自家の多年經驗し來つた工夫の施設のもとに、遍く床の面に溫氣の行き亙る様に竇道を設け、竇道の一端は、壁外の煙突に通じ、他の一端は土間に据ゑた竈の奥に連結させて置くのである。されば日夕炊爨するその火氣は、煙と共に榮螺の殼のごとき竇道を傳つて土床を溫め、やがて層外の煙突より放散されるのである。床には煙の室内に漏れ出づるを防ぐ爲に紙をもつて目張をなし、その上に朝鮮油團を敷く。庶民の多くは褥も敷かず固き床の上に胡坐し、奇寒膚に砭するやうな冬の夜にも、一枚の煎餅蒲團、薄い小夜具の一襲を被りて、臥するのみである。移住の內地人は、多くは煖爐又はペーチカを置いて防寒の用意をなせど、中にはやはり朝鮮風の溫突室も造つてゐる。京城その他都會の內地人

三　朝鮮の四季

志賀矧川　名は重昂。地理學者。文筆に長ず。愛知縣岡崎市の人。昭和二年歿、年六十五。



危坐

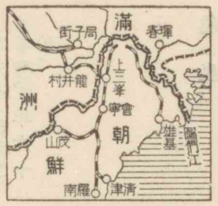
神仙爐

向きの貸家は、その一室には必ず溫突の設備があるやうになつたといふ。東京でも、曾て亡友志賀矧川氏が代々木の邸の一室を溫突式となし、年の暮、その溫突開きの當夜、知人數輩を招いて朝鮮料理を饗應したことがある。私も亦招かれた客の一人であつたが、折からの微雪、窓邊の竹に洒いで、寒さの殊に酷だしい宵ではあつたが、坐間には唯喫煙用の煙草盆があるのみで、絕えて火氣のなかつたに拘らず、和やかな溫氣は危坐の膝を煖めて、人をして覺えず睡を催さしむる美慵を感じた。さてくさ〴〵の料理の出た後、最後の神仙爐を圍んだ時には、溫か過ぎて、額に薄汗のにじみ出づるを覺えた程であつた。文筆に携はる人の讀書述作の室か、若しくは閑時閑客と面晤する閑房としては、誠に妙といふべきであるが、邦人の習慣より言へば、溫突室には久しく居るべからざるものであらうと思ふ。朝鮮の人の懶惰の習性は、或はこの溫突あるが爲

二百五十韓里　約九十八粁。

枕藉

龍井村附近地圖



兀良哈　明初の頃遼東に侵入して來た部族の名。こゝでは古その部族のゐた土地のこと。

であらう。私は曾て平壤大戰を觀ての歸途、黄州から南首陽山を踰えて海州より汽船、仁川に歸つたことがある。當時年少、二百五十韓里を一日半を以て踏破した。夜中、銀波の河を徒渉し、とある河畔の客舍を叩き、水に濡れた服をも脱がず、行旅の朝鮮の人達が雜然として枕藉してゐる溫突の室に入つて、夜の明くる間の少睡を取つたが、やがて惡夢に魘はれたやうに驚き覺めると、さながら新たに蒸甑の中より出でたる甘藷の如く、白氣濛々として滿身より立昇り、流汗、膚に遍く堪ふべからざるの奇痒を覺えた。傍らに臥してゐた朝鮮の人たちも立騷ぐこの物音に夢を破られ、眼を睜りて訝り眺めてゐるも道理こそ、濡れた衣服は溫突の熱氣に蒸されてかくの始末となつたのであつた。今年の春の旅行にも、會寧より圖們江を渡りて龍井村を訪づれた時、春とはいへど胡沙吹く風のまだ寒い古兀良哈(オランカイ)旅館の主人の親切から溫突の室に幾夜を

過したが、厚衾襲ねての夜半の夢は、吾が家に居る時のやうに圓かならず、襲ねた衾をはねのけて、僅に一枚の小夜具を被つて辛うじて眠ることを得たこともある。しかも夜明けて後の心地は、何となく濛朧として、頭の岑々と痛むを覺えたのを見れば、溫突はたしかに邦人の習性には適したものではあるまいと思ふ。さりながら、私は朝鮮の春と夏と秋とを知つて、未だ冬を知らない。寒威の酷だしい朝鮮の、しかも彼の土壁、草屋、隙もる風の刀のごとき民家にあつては、この溫突あつて始めて寒き夜を凍えずに過され得ることであらう。

（滿鮮趣味の旅）

島崎藤村　名は春樹。詩人。小説家。長野縣の人。明治五年生。

なかるらん。

照すかな。

四　晩春の別離

島崎藤村

時は暮れゆく春よりぞ
また短きはなかるらん。
恨は友のわかれより
さらに長きはなかるらん。

君をおくりて花ちかき
高樓(たかどの)までも來て見れば、
みどりにまよふ鶯は
霞むなしく鳴きかへり、
しろき光は佐保姫の
春の車駕(くるま)を照すかな。

膽吹　伊吹とも書く。近江國(滋賀縣)と美濃國(岐阜縣)との境に聳えてゐる山。海拔一三七七米。

比良　近江國(滋賀縣)の西部、比叡の北方に聳えてゐる山。海拔一一七四米。近江八景の一。

法皇　白河法皇。

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでて、
おもへば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき、
ひがし膽吹(いぶき)の山高く、
西には比叡・比良の峯、
日は行きかよふ山々の
ふかきながめを伏し仰ぎ
いかにすぐれし想(おも)ひをか
沈める波にたゝふらん。
ながれはむなし、法皇の

うつろふ

春さり行かば

夢はるかなる賀茂の水、
水にうつろふ山城の
みやびの都ゆく春の
かすめる姿見つくして、
畿内にせまる伊賀・伊勢の
鈴鹿の山の波とほく
海に落つるを望む時、
いかによろづの恨をば、
空行く鷲に窮むらん。

春さり行かば、青によし
奈良の都にたづね入り、
としつき君がこひしたふ

鳴門　阿波の東北端と淡路との間。

御堂のうちに遊ぶ時、
ふるき藝術(たくみ)の花の香の
伽藍の壁にのこりなば、
いかに韻(にほひ)を身にしめて、
深き思ひにしづむらん。

さては秋津の島が根の
南のつばさ紀の國を
めぐりて進む黒潮の、
鳴門に落ちて行く所、
天際(あまぎは)遠く白き日の
光をもらす雲裂けて、
目にはるかなる遠海の

歌枕

明石の浦　兵庫縣明石市の南海岸。

舞子の濱　兵庫縣明石郡垂水の海濱。須磨と明石との中間。

波のをどるを望む時、
いかに胸打つ音たかく、
君が血汐のさわぐらん。
または名に負ふ歌枕
波に千とせの色映る
明石の浦の朝ぼらけ。
松よろづよの音にひゞく
舞子の濱のゆふまぐれ、
もしそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影くらく、
さ霧のうちに鳴きかよふ
千鳥の聲を聞く時は、

ひめごと

いかに浦邊にさすらひて
遠き昔をしのぶらん。
げに君がため山々は
雲を停めん、浦々は
磯にながるゝ白波を
あげんとすらん。よしさらば、
旅路遙に野邊行かば
野邊のひめごと、森行かば
森のひめごと探りもて、
高きに登り、あめつちの
もなかに遊び、大川の
ながれをきはめ、山々の

よばひ

神をもよばひ、谷々の
鬼をもおこし、歌人の
魂をも遠く返しつゝ、
清(すゞ)しき聲をうちあげて、
朽ちせぬ琴をかきならせ。

さらば名殘は盡きずとも、
たもとを分つゆふまぐれ、
見よ、影ふかき欄干(おばしま)に、
けむりをふくむ藤の花。
北行く雁はおほ空の
霞に沈み鳴きかへり、
彩(あや)なす雲も愁へつゝ、

家づと

君を送るに似たりけり。
あゝいつかまた相逢うて
もとの契をあたゝめん。
梅も櫻も散りはてて、
すでに柳は深みどり、
人はあかねど、ゆく春を
いつまでこゝに留むべき。
われに惜しむな、家づとの
一枝の筆の花の色香を。

藤村詩集)

安倍能成
京城帝國大學教授。哲學者。松山市の人。明治十六年生。

五 新綠の野

安倍能成

新綠の野の景色は非常に僕の心を引く。目もさめる樣な綠の野は、晴れた日も、曇つた日も、雨の降る日もよい。殊に晴れた日の朝、日のまだ多く上らぬ、空氣の淸らかな、心の新しい時に、生命に充ちた新綠に對する心持は實に何とも言へない。僕は近年僕の生活になかつた充實を新綠から與へられて居る。

新綠の梢を仰いで僕の胸の中に充ちる思ひは、一種の驚歎である。讃美である。新綠に對すると、僕の眼にはいつしか涙がこみあげて來る。僕は何よりも今年の新綠が、僕のこの四五年の生活に殆ど涸れて居た悲哀の涙を復活させてくれる緣となつたのが嬉しい。若い楓の葉をすかして日光の洩れる時の樣な色調が、和やかに僕の腸まで滲みて來る樣な氣がする。爽涼の感に濕潤の氣を缺かぬ樣な一脈の悲しみが、涙に少し熱くなつた僕の眼邊から、徐かに全身に廻つて行く樣に思はれる。靜な、併しながら緊張した、充實して居て而も寂しい悲哀である。自然の懷に抱かれ、人の世を厭はずして悲しむ樣な心持である。新綠に催された涙を靜に胸に湛へて、頭を垂れつゝ晩春の野に樣々な瞑想に耽るのは、心ゆくことである。

あゝ若き自然の力、新綠の野にはこの力が溢れて居る。晩春の野を吹く風は、この若き力の包むに餘る歡喜を運びつゝあるかの如く思はれる。風にゆらぐ樹々の梢に對しては、いつまでもこの刹那を持續したいといふ愛着が起る。僕はこの力を讃美したい。新しい若芽が段々と硬(こは)くなり、黑くなつて來るのは悲しいものである。花の散るのよりもこの方が大分惜しい。花は散るけれど、葉は殘つて居るからかも知れぬ。木々の葉の中にも一番この

心ゆく

刹那

枳殼

中野 東京市中野區。

山毛欅

感じの多いのは櫻である。華やかな花の色に春の盛りを示したその梢は、眞先に現實的な夏の色となるのがはかないやうに思はれる。枳殼(からたち)の芽の出たての色の若々しい新しい心持。あの固い木針も、その頃は指の押へるまゝに、和やかに甘えたやうに頭を下げるのである。東京の近郊に木の多いのは何よりも愉快である。中野のステーションから出て、二三町も來て右手の方を見廻すと、水田の彼方に麥畑が見え、その向うにすぐ幾重の木々の梢が見える。松の木がむら〳〵と集つた向うに、山毛欅(ぶな)の淺綠色の新しい梢が高く聳えて居る。そのまたこちらに杉の林があると、その隣には竹藪がある。竹藪の新しい葉の色が、この頃は柔らかい潤ひのある茶褐色に見える。

要するに新綠はいゝ、實にいゝ、たまらなくいゝと言つたら濟むのか知らぬが、それだけでは物足りない。僕はこの頃新綠に對す

感傷的

他の奇がない

ると、いつも一種の感傷的な心持になつて來る。

公孫樹は面白い木だ。秋になつて、黄色い葉の梢に夕日を浴びた雄姿は格別だけれども、春の初、小さな芽があの大きな體軀に出て來た時分には、大男の尻のあたりで細い帶をちよこなんと結んで居るやうな滑稽な所がある。柿若葉といふことをいふが、この頃の柿の葉の色は實に驚くべきものである。黄色の勝つた潤澤の多いあの若葉が、晩春の日を浴びて立つて居る姿は、實に魂を奪ふばかりである。櫟の木は平凡で、他の奇がないやうで居て、中々捨て難い。この木の芽を吹くのは外の木よりは遲い。外の木が已に綠になつてゐる時分、やう〳〵この木が芽を出して來る。少し遠方から見ると、綠の色がわづかに薄く櫟林に動いて居る樣が、如何にも謙遜な、ひかへ目な樣に感ぜられる。この頃はもうはや梢一ぱいの葉となつた。僕は日に青くすいて見えるこの葉の下

道を、さら〳〵と梢を吹くこの頃の心持よい風に吹かれながら、ゆらぐ葉影を踏んで行くのが愉快でたまらぬ。

幾叢の森に圍まれた麥畑の麥も、この頃は穗を出した。ずつと見渡すと、畑から森から、綠の色の見えるあたりに、地の下からむらむらと力が溢れ出て居る樣に感ぜられる。僕はこれを見ると、雪の上に轉ぶ狗兒の樣に、ごろりと麥畑の上に引つくりかへつてやりたいやうな原始的な氣持になつてしまふ。

朝など少し薄暗い樹蔭の道を行く時に、ふと傍らの杉垣の黑色の中に、灯のやうに、新しい芽が去年の舊い葉の上に點々と出て居るのを發見するのも一種の驚きである。垣の隙間から新しい筍が竹藪の中に生え出したのを見ても、何だか非常に珍しい新しい心持がする。

自分の實生活に對する一種の不安を感じて、いやな氣持を懷いて、この新綠の野に對した時、何故にこの美しい天地を外にして下らぬことを考へたり、したりするのだらうと思ふ。そして自分は一生何物をも背負はずに、森から森へと漂泊して行つたらどうであらう、寂しい、そして悲しい心に、積り重なつた綠の梢から洩れる日の光を仰ぐ時の氣持はどうであらうなどと空想を馳せても見る。自然の兒、人間は自然の兒であるべきものではないのか。嗚呼自然の兒、如何に簡單にしてわづらひなき名よ。

（山中雜記）

生田春月　名は清平。詩人。鳥取縣の人。昭和五年歿、年三十九。

六　かゞやく露

生田春月

いつの頃から、庭にこぼれ〱してゐた稗——小鳥の餌の——が、庭石をかこんで、あちらにもこちらにも茂りあつて來た。丁度水邊の若い葦の葉を見るやうで快い。しなやかなその左右にひらいてゐる葉が、美しい撓みを見せてゐて、何となく柔らかい感じだ。

この梅雨に入つてから、その葉の上に毎朝露をむすぶ。この露が光る。葉に觸れてゐる部分の底部から白く光る。眞上から見下すと白光は消えて見えないが、はなれてほどよく見ると白露團團、楚にして艶、美と力との豐滿が示されてゐる。この庭前の小景は私に故鄕の稻田のながめをおもひ出させる。稻田におく夕の露、夜の露、曉の露、日の出前の露の美しさ。稻田の水引きの若い、農夫

激越

生彩

さへも見すごさぬながめである。或年の夏、甲州で四五日くらした時も、朝毎のこの稻田の多くの葉にやどる露を見るのを樂しみにしたことだつた。

露には露の詩があり、神祕がある。これをはかなしとするも華やかなりとするも、人の心の明暗・强弱を物語る一つの象徴となるであらう。それは一粒の水玉である。微な〱濕りが寄りあつまつて量になつて、一つの水のグループをつくつてゐるもの、およそ水の多く平らかな時には、その上におちる陽の光は廣い明るさになつてゐて、それは穩やかな心持の色を示す。しかし、かたまつてゐる水の玉、露に光のさす時には激越した感情のやうにつよく光る。朝露の美しさは陽が出て一時間位の間の新しい光の中においてもつとも生彩がある。

いふまでもなく露はいろ〱のものの上にやどる。石垣の上

に、やねの上に、土の上に、板べいの上に、けれども石や土や木の上は、まことに流れやすく、消えやすい。 やはり人間が、その性格の適するところに生活をしようとするにも似て、露もそのもつともおちつきやすいところに長くおちつかうとする。 露のもつとも美しくおちついて宿つてゐるところは葉の上である。 木の葉のうへ、草の葉のうへ――。

田舍の道を曉から陽の出まへにあるいて行くと、稻の葉のうへに、芋の葉のうへに豆の葉のうへに、雜草のうへに露はしとゞにやどつてゐる。 そして、私の袖やもすそがさはらなければ、露はもつともつとこぼれないであらう――。

池などの蓮の葉の上にたまる露は、里芋の上にたまる露と同じやうに、その厚い葉の表面の毛のやうなものに、綾なされて、白い底の光澤をもつて、かなり大きい玉にむすばれるのが普通である。

つかのま

從つて、陽が高くなるまでも光つてゐる。 おどけものの蛙が出て來て葉によぢのぼり、その大きいまるい葉のまんなかにくぼみをつくると、露はする〳〵とそこへ走りおちて來て、そして蛙の足に眞珠のかざりをつける。 けれども蛙は何の氣もない、プイと蛙が、池の中にとびこむと、それと同時に露も水の中に――。 そしてもうあとかたもない。

又露が、農家の竹やぶや生垣や、又は少し荒れた軒から椿の木の枝などにかけわたしてゐる蜘蛛の巣に、幾粒となく、むすびついて、その蜘蛛の巣の上で光つてゐるのだが、風が吹いて來たりすると、まるで魔術のやうにどこへか散りうせてしまふ。

露の散り消えるのはその行方が知れぬ。 はら〳〵と草の上から土の上におちても、おちた時にはもうその形はないのだから――、形といふものが、ごくつかのまのものであるといふこと、光りか

主觀

がやいてゐる美しさが淸いうつくしいものであればあるだけ、それを人間の生死の上に、世の中の無常といふことに結びつけて、悲しみ、かこつたのは昔の人の主觀である。

今私たちは露のもろくも散りうせることよりも、露の白くも黃金色にもかゞやきをもちつゝ、その形を與へられ保たれてゐる間の「時」を充實させてゐる相（すがた）により多くの感動をうける。

生きよ、淸く生きよ、美しく生きよ、生きてかゞやけよ、これが露の詩魂ではなからうか。

（生命の道）

次の文より副詞・接續詞・感動詞を選べ

イ、あゝいつかまた相逢うてもとの契をあたゝめん

ロ、露はする〱と走りおちて來てそして蛙の足に眞珠のかざりをつける。

北畠親房　吉野朝の忠臣。正平九年（二〇一四）歿、年六十三。

前車の轍

有難き習

七 人臣の道

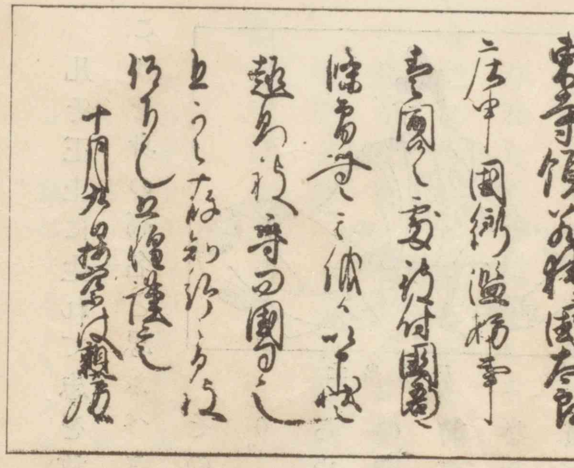
北畠親房

北畠親房

凡そ王土に生れて忠を致し、命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、自ら危むるはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有難き習なりけむかし。中古までは、人のさのみ豪强なるをば戒められき。豪强になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

制　符

東寺領若狹國太良庄申、國衙濫妨事、奏聞候之處、被付國衙之條、曾無其儀候。以申狀之趣、則被尋問國司候也。且可令存知給之旨、被仰下候也。恐惶謹言
十月九日　按察使親房狀



北畠親房筆蹟

鳥羽院の御代にや、「諸國の武士の源平の家に屬することを停むべし。」といふ制符たびたびありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜りて、諸國のつはものを徵し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されき。果して今までの亂世の基なればいひがひなきことになりにけり。

この頃の諺には、一たび軍に驅け合ひ、或は家の子・郎從節に死ぬるたぐひもあれば、「我が功におきては日

言語は云々
「言語者君子之樞機。」（易　經）

堅き氷云々
「履霜堅氷至。」（易　經）

許　由
箕山に住居した隱者。

潁　川
支那河南省開封府に在る川。

本國を賜へ。」若しくは「半國を賜るとも足るべからず。」などぞ申すめる。實にさまで思ふことにはあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、また朝威の輕々しさも推しはからるゝものなり。「言語は君子の樞機なり。」といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子といふものは、その初、心言葉を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらず、人の心の惡しくなりゆくを末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へむとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らざりき。その人の五臟六腑の變るにはあらじ。よく思ひならはせる故にこそあらめ。なほ行末の人の心、想ひやるこそあさましけれ。大方おのれ一

將門 平良將の第三子。下總猿島に僞宮を建て朝儀に擬へた爲に天慶三年(一六〇〇)遂に誅せられた。

高祖 漢帝の第一代。姓は劉、名は邦。

身は恩に誇るとも、萬人の怨を殘すべきことをばなどか顧みざらむ。君は萬姓の主にてましませば、限りある地をもちて、限りなき人に頒たせ給はむことは、推してもはかり奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆ふさがりなむ。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬人の人は悦ばじ。況や日本の半ばを心ざし、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して、言葉にも出で、面に恥づる色のなきを、謀叛のはじめといふべきなり。昔の將門は比叡山に登りて、大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひに侍りけむ。昔は人の心正しくして、自ら將門に見も懲り聞きも懲りはべりけむを、今は人々の心かくのみなりにたれば、この世は能く衰へぬるにや。

籌を帷幄の中にめぐらし云々 「運籌帷幄之中決勝千里之外吾不如子房。」(史記)

文治の頃 後鳥羽天皇の文治五年(一八四九)。

泰衡 藤原泰衡のこと。

平重忠 畠山重忠のこと。

五十四郡 昔は奧州五十四郡。

をのこ

漢の高祖の天下をとりしは、蕭何張良韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、「籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこの人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代のことぞかし、賴朝の時までも、文治の頃にや、奧の泰衡を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、きはめたる少き所を望みて賜りけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめむ爲にや、賢かりけるをのこにこそ。

(神皇正統記)

八　松の下露

太平記

さるほどに類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始めまゐらせて、宮々・卿相雲客、皆徒跣(かちはだし)なる體にて、いづこを指すともなく、足にまかせて落ち行き給ふ。この人々、はじめ一二町が程こそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ。雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第に別々となりて、後にはたゞ藤房・季房二人より外は主上の御手を引きまゐらする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、そこ とも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして、夜の中に赤坂の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にもいまだ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二歩には立ちどまり、晝

太平記　四十巻。作者未詳。花園天皇の文保二年(一九七八)から、後村上天皇の正平二十二年(二〇二七)に至る凡そ五十年間の軍記物語。

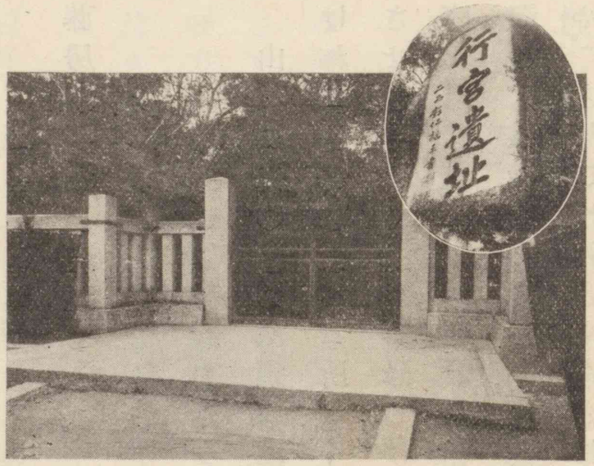
主上　第九十六代後醍醐天皇。

藤房　吉野朝の忠臣。藤原藤房。

季房　藤原季房。藤房の弟。

赤坂　大阪府南河内郡赤坂村。金剛山の北麓に在る。

は道の傍らなる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅穀の御袖をほしあへず。とかくして夜晝三日に、山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。藤房も、季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなる目に逢ふとも、逃れぬべき心地せざりければ、せむ方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣・兄弟諸共に、現の夢に臥し給ふ、梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと聞召して、木蔭に立寄らせ給ひたれば、下露のはら〱と御袖にかゝりけるを、主



笠置行宮遺址

羅穀の袖

有王山　京都府綴喜郡多賀村と井出村との中間に在る。

笠置　京都府相樂郡。山城國(京都府)と大和國(奈良縣)との國境、木津川の南岸に聳えてゐる山。

擧げばや。

上御覽ぜられて、

さして行く笠置の山を出でしより
天が下にはかくれがもなし

藤房卿涙をおさへて、

いかにせむ賴むかげとて立寄れば
なほ袖ぬらす松のしたつゆ

山城の國の住人深須入道・松井藏人二人は、この邊の案內者なりければ、山々峯々殘る所なく搜しける間、皇居隱れなく尋ね出されさせ給ふ。主上誠に恐しげなる御氣色にて、「汝等心あるものならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、「あはれ、この君を隱し奉りて、義兵を擧げばや。」と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして、道の成り難からむことをはかつて、もだしける

內山　奈良縣山邊郡朝和村に在る。

殷湯云々　殷の湯王が夏の桀王の爲に夏臺といふ牢獄に投ぜられたことをいふ。

越王勾踐。

會稽　今の浙江省紹興縣に在る山。

六波羅　京都賀茂川の東、五條と六條との間。北條氏が探題をおいた所。

平等院　京都府宇治町に在る。天台宗に屬してゐる。源融の山荘であつた。

兩大將　足利高氏と大佛貞直。

持明院　光嚴院。

こそうたてけれ。俄の事にて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せ參らせて、まづ南都の內山へ入れ奉る。その體、たゞ殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降ぜし昔の夢に異らず。これを聞きこれを見る人每に、袖を濡さずといふことなかりけり。

この時こゝかしこにて生捕られ給ひける人々都合六十一人、その所從眷屬どもに至るまでは、數ふるに遑あらず。或は籠輿に召させられ、或は傳馬に乘せられて、白晝に京都へ入り給ひければ、その方ざまかと覺ゆる男女ちまたに立ちならびて、人目をも憚らず泣き悲しむ。あさましかりし有樣なり。

十月二日、六波羅の北の方、常葉駿河守範貞、三千餘騎にて路を警固仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將、京へは入らずして、すぐに宇治へ參り向ひて龍顏に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給はりて、持明院へ參らすべき由を奏聞す。主

上、藤房を以て仰せ出されけるは、「三種の神器は古より繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を掌に握るものありと雖も、未だこの三種の重器を、自ら擅にして、新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に棄て置き奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも我が國の守とならせ給はぬ事あらじ。寶劍は武家の輩若し天罰を顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させ給はむ爲に、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり。」と仰せられければ、東使兩人も、六波羅も、詞なくして退出す。

翌日に龍駕を廻らして六波羅へ成しまゐらせむとしけるを、さきざき臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、強ひて仰せ出さ

袞衣　天皇の禮服。

紫宸北極

天上の五衰　天人も臨終にはまぬかれぬといふ五種の衰相。

人間の一炊　支那の盧生が黍飯一炊の間に夢見た故事。世のはかないたとへ。

れける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸にことかはりて、鳳輦は數萬の武士にうち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠・輿・傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原を上りて、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかなきのふは紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の裝ひをつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の嚴しきに御心を惱ませらる。時移り事去り、樂しみつきて悲しみ來る。天上の五衰、人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思召し出す御事多きをりふし、時雨の音一通り、軒端の月に過ぎけるを聞召して、

住みなれぬ板屋の軒の村時雨
音を聞くにも袖はぬれけり

新葉集　二十卷。吉野朝の歌集。宗良親王のお撰びになつたもの。

九　吉野の行宮

新葉集

吉野の行宮にてよませ給ひける御歌の中に

後醍醐天皇御製

臥しわびぬ霜寒き夜の床はあれて袖にはげしき山おろしの風

朝拜の心を

後村上天皇御製

たかみくらとばりかゝげて橿原の宮のむかしもしるき春かな

あづまのかたに久しく侍りて、ひたすらものゝふの道にのみたづさはりつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも、おもひのほかなるやうにおぼえてよみ侍りし

中務卿宗良親王

思ひきや手もふれざりし梓弓おき臥しわが身なれむものとは

おなじ比、武藏國へうちこえて、こてさしはらといふ所におりゐて、手分などし侍りし時、いさみあるべきよしつはものどもにめし仰せ侍りし次に、思ひつゞけ侍りし

君のため世のため何か惜しからむすててかひある命なりせば

こてさしはら　埼玉縣入間郡小手指村に在る原野。

吉田絃二郎　名は源次郎。小說家。早稻田大學講師。佐賀縣の人。明治十九年生。

ソクラテース　ギリシヤ古代の哲學者（西紀前四六九—三九九）。

ソロモン　西紀前十世紀のイスラエルの王。

キリスト　西紀前四年ユダヤのベツレヘムに生れた。キリスト教の祖。

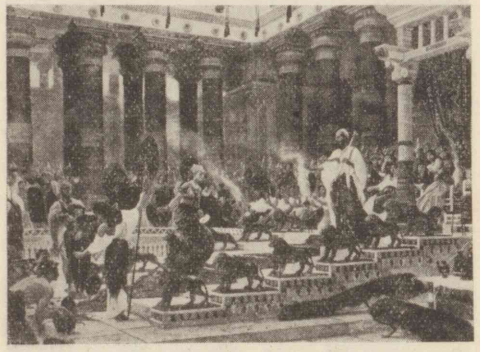
一〇 試煉

吉田絃二郎

何も持つてゐないといふことは、人間としてかなり寂しい生活であるにちがひない。しかし何も持つてゐない生活を心からありがたく、尊く思ふ人でなければ、ほんたうな人生の味といふものを噛みしめることはできないであらう。

哲人ソクラテースは知識の究竟は「自分は何も知らぬ愚者。」といふことを意識することであると言つた。知者にとつては自分の無智なことを心から覺るのが、唯一つの救ひの道でなければならぬ。金を持てる者にとつては、金を捨てることが唯一つの救ひの道でなければならぬ。官位を持つた者にとつては、官位を捨てることが、かれ自身を救ふ最後の方法でなければならぬ。

「ソロモンの榮華も野の百合に及ばざりき。」と言つたキリストの言葉は決して譬喩的な美辭ではない。野の百合は百合であるが故に、ソロモン王の榮華にもまさる幸福を持つことができたのであつた。ソロモンの生活は王といふ權威に囚はれたがために、ほんたうな人間の幸福を持つことはできなかつた。ソロモンがもし眞人間の生活を持つことができたならば、かれも亦野の百合と同じ生活の幸福を味はふことができた筈である。



ソロモンの榮華

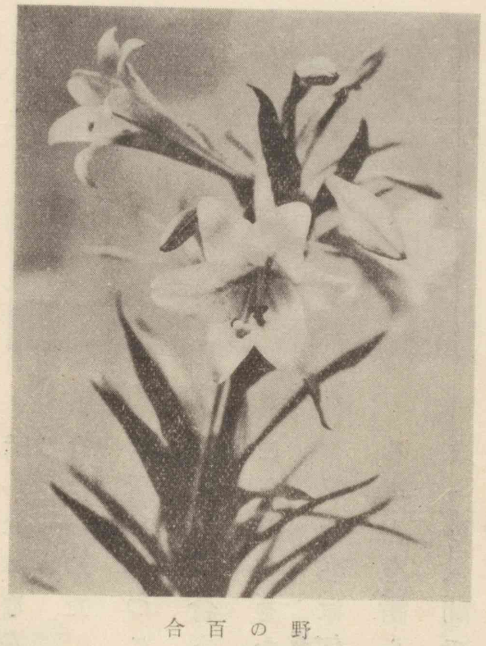
私たちは何物をも持たぬ眞人間であることを祈らなければならぬ。自然のまゝの人間であることをもとめなければならぬ。嬰兒であることを冀はなければならぬ。

私たちは富を持たぬことのために、毎日何れほどの苦痛や屈辱

嬰兒

やを忍ばなければならぬか知れぬ。私たちは貧しかつたがために、富める人たちの夢にも知らぬやうないろ〳〵な涙をも經驗しなければならなかつた。

私たちは貧しいといふことを呪つたことも多くあつた。しかし私たちは貧しいことのために、自分の魂を傷つけてはならぬ。自分の素直な魂を歪に曲げてはならぬ。



野の百合

私たちは貧しければこそ、人間の世の美しい同情や、愛や、涙といふことをいやといふほど味ははせられたのであつた。また苦痛といふことをも味はつた。

機縁

涙があり、苦痛があつてこそ、私たちの魂は錬られ、磨かれ、豊にせられ、伸び展げられて行く。

しかし涙や、苦痛は一方では私たちの魂を大きくし、深くし、人間らしくする機縁であるが、同時に涙や苦痛は私たちの魂を歪にしたり、頑にしたりする力をも持つてゐることを忘れてはならぬ。

悲しみや苦痛は神の鞭である。素直な心の人にとつては神の鞭は自分を一層正しく、善くするものである。けれども、邪な心の人にとつては神の鞭は、かれ自身をます〳〵正しいことや、善き事から遠ざけるものとなる。

私たちは自分の心を素直に保つて、日々の苦痛や涙を感謝しながら受容れなければならぬ。

（小鳥の來る日）

川路柳虹　名は誠。畫家。詩人。東京市の人。明治二十一年生。

二　希望の海

川路柳虹

青い空を映す海は
希望に燃えた吾々の心だ。
はてしなく、かゞやかしく、
曇なく、底しれず、
たゝへた波のすゝむ果に、
われらののぞむところの
彼方の岸がある。
さへぎるものもない
ゆたかな力の漲る海！

微風の羽ばたきと、
きらめく日光と、
走る船の帆のかゞやき、
海はあらゆるものをのせて、
その重みを知ることなく、
みづからの歩みを、
しづかにのたうつ。
あゝ自由と力の大洋！
いつも輝く海、いつも動く海、
その果に、そのかなたに、
希望の岸はよこたはる。

（預言）

矢野龍溪　名は文雄。政論家。もと外交官。大分縣の人。大正六年歿、年八十二。
ハンニバル　古代北アフリカの都市カルタゴの英傑（西紀前二四七―一八三）。
帥ゐ。

一三 ハンニバル

矢野龍溪

英雄の成敗には千古傷心のこと少からずと雖も、東西古今を通じて、ハンニバルの事の如く悲しきは非ざるなり。幼齢九歳の彼が、その父に伴はれて神の卓前に立ち、國讐なるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより、その終焉に至るまで、一念常に國讐を報ずるに非ざるものなし。彼は二十七歳、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入せしより以來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂しみを享けたる跡なし。大功成るに垂（なんなん）として果さず、ローマに窮迫せられて、諸邦の朝廷に流寓し、遂に毒を仰いで斃る。嗚呼、人生の慘なる、またこの人の如きを見ざるなり。

若し彼をして尋常人ならしめば、また深く悲しむに足るものな

勝へ。
カルタゴ　北部アフリカのチュニス市の東北に在る都市。西紀前八五〇年の建國。地中海の覇權につきローマと爭ふ。

し。然れどもその用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家に非ず、文ありて武なき文弱人に非ず。人格上一點の非議すべきところなく、而してその末路この如し。これ特に人をして傷心に勝（た）へざらしむる所以なり。

地中海を隔てて南北に對峙するものはローマ・カルタゴの二共和國なり。天は兩雄邦の並立を許さず、彼亡びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛んならず。ロ人は戰鬪を事とする尙武の民なり。カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ人をしてロ兵と戰はしむるは、羊を驅つて狼に向はしむるが如し。

況やハンニバルの事に當りしは、既にその國が一たび痛擊を受けたる後なるをや。本國人の賴むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、これを以て强敵に當らんとす。事固よ

ピレネー　佛國と西班牙との國境をかぎる山脈。

アルプス　伊・佛・瑞・獨・墺諸國に亙る大山脈。長さ七五〇粁。

ゴール　フランスの古稱。

り既に非なり。彼豈これを知らざらんや。知つて而してこゝに出づる、また實に勢の已むを得ざるものあればなり。

彼が志を決してスペインを發するに臨み、その兵殆ど十萬と號す。然れども、ピレネーの峻嶺を越え、アルプスの難路を過ぎ終へし時、その兵既に四分の一に減ず。彼がローマの北野に進みし時は、見兵僅に二萬五千に過ぎざるなり。その途上に於て兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令していはく、「去らんと欲する者は去れ。從ふことを樂しむ者は來れ。」と。この時に當りて將軍を棄てんとする者數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而してその兵はスペイン及びゴール北部諸種の蠻族より組成せる者のみ。決してかの愛國心燃ゆるが如きロ兵の比に非ざるなり。蕪雜烏合のこの兵に對して恩威の大なるものあるに非ざるよりは、いづくんぞ能くかくの如くなる

アレキサンダー　マケドニヤ王（西紀前三五六—三二三）。

フレデリック　プロシヤ王（西紀一七一二—一七八六）。

カンネ　古代イタリー、アプリヤ州の首府。西紀前二一六年ハンニバル四萬の兵を以て八萬餘のローマ軍をこの地に破つた。

を得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、その兵士は多く統一せる國民にして、愛國心ある者に非ざるはなし。たゞそれハンニバルに至つては即ち然らず。その將士はその將軍に對して、單に恩威を感ずるのみ、實に愛國の要素を缺けり。この異様の兵を以て、かの將來印度以西を統一すべき運命を擔へる勇武絶倫、愛國無雙のローマ人に敵對し、一たびは殆どこれを壓服せんとしたるなり。嗚呼、この人の外、千古またこの人あらんや。

ひとり人品のみならず、その戰闘に長ずることもまた古今無雙なり。アレキサンダー・フレデリック・ナポレオンと雖も、その上に出づるを得ず。これ余の私評に非ず、歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と强弱勇怯既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして、我は毎に寡兵なり。然るになほ奇戰には謀略を用ひ、正戰には戰術を用ふ。有名なるカンネの大戰を見よ。彼の兵數は敵軍の

款を送る

半ばにも當らざりしに非ずや。しかも堂々たる正戰に於て、彼は巧妙なる戰術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に遺して潰敗せしめたり。かくの如き全勝は、歴史上實に稀有のこととなりとす。戰地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指環數斛を、彼の使が本國にもたらし歸りてこれを國會に示せる時、その國人の驚喜は幾何なりしぞ。この大勝に乘じて直ちにローマを衝かざりしは後人の憾むところなりと雖も、その兵やもと甚だ多からず、加ふるに戰後の疲憊を以てす。この危道を行かずとも、一方にはイタリー南部の城邑は皆遂に款を送る勢あり、彼を捨て此を取る、また理なしとせんや。この戰の夕、一部將が「我に三千の騎兵を與へよ。將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして軍をローマの城中に晩食せしめん。」と獻策せし時、既にその得失を知る、必ずしも後人の非議を待たざるなり。

國帑

かの國人は必要大切なる場合にも、曾て十分なる援兵を彼に送りしことなく、十分なる金穀を彼に與へしことなし。これ彼が十六年間敵國を蹂躙しながら、遂にその成功を最後に誤りし大原因なり。實に本國人民の罪にして、彼の罪に非ず。かくの如くにして彼は十六年間みづから兵を他國に募りてその缺を補へるのみならず、その金穀も毎にこれを敵國に取れり。その忍耐の大なる、またその智略と並行すといふべし。

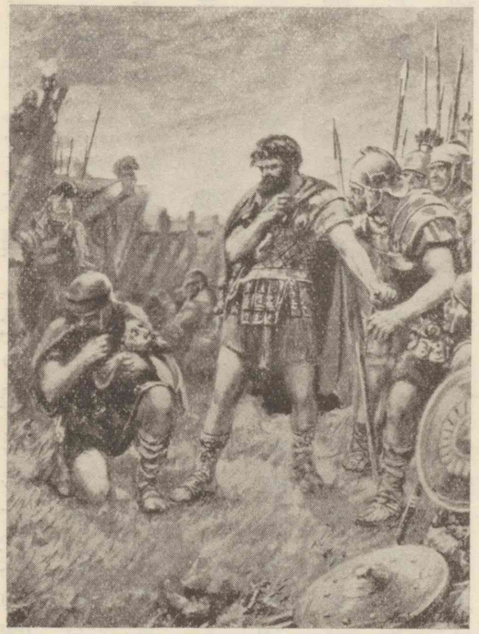
彼は善く戰へり。彼は巧に外交を操縱せり。然れどもその本國は却つて敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで彼を召喚してこれに當らしむ。嗚呼、また遲し。彼の智勇もこれを如何ともする能はず。而も尙この存亡の秋に在つて、敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大

武弁

ハスドルバル　西紀前二〇七年歿。

なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武弁ならんや。彼をして平時に出でしめば、必ずや治平の良宰相たらん。

その未だ本國に召喚せられずして、ローマの野に轉戰するや、兵寡く食つく。恢復の望は、單にかゝりてその實弟ハスドルバルがスペインより援兵を率ゐて來り合するにありしなり。



ハンニバル實弟の首級を見る

然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリーの北野に破られ、彼が手を握りて久闊の喜びを敍せんと樂しみたるその人の首級は、敵の槍鋒に貫かれて、遂に彼が營前に現れたり。嗚呼、人生悲慘のこ

出師云々　唐の詩人杜甫の句。

五丈原　陝西省鳳翔縣の地名。諸葛亮の本營の在つた所。

武侯　諸葛亮。字は孔明。蜀漢の忠臣。

餘杭　今の浙江省の杭州府。

岳武穆　岳飛。宋の忠臣。武穆はその謚號。

と多しと雖も、未だこの人のこの時の如きは非ざるなり。

彼が遂に弟の首級を望みける時、「今我カルタゴの運命を知れり。」と歎ぜし一言は、いかに無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず。況や自國の興亡はこの援軍の勝敗にかゝりしをや。史を讀んでこゝに至り、卷を掩うて長歎せざる者果して幾人かある。「出師未捷身先死」の五丈原頭の武侯や、盡忠報國の黥文を露して餘杭の市に斬られし岳武穆も、また何ぞ比するに足らん。

彼の戰略戰術が人目を眩耀するが爲に、人或はその名將たるを知つてその人格を察せず。若し能くこれを究めば、その不幸を悲しむ情うたゝ深きを加へん。

嗚呼、千古傷心のこと、實にこの人の人生の如きは非ざるなり。

（出鱈目の記）

保元物語　三卷。著者未詳。保元の亂の顚末を記した軍記物語。
白河殿　白河法皇の御所。二條通の北、富小路通邊に在つた。
左大臣殿　藤原賴長。關白忠通の弟。
内裏　後白河天皇の方。
鎭西八郎　源爲朝。爲義の八男。武將。嘉應二年（一八三〇）歿、三十二。
除目
物騷

一三　爲朝の弓勢

保元物語

白河殿にはかくとも知ろしめさざりしかば、左大臣殿武者所の親久を召されて、「内裏の様見て參れ。」と仰せければ、親久卽ち馳せ歸り、「官軍既に寄せ候。」と、申しも果てぬに、先陣既に馳せ來る。その時鎭西八郎申しけるは、「爲朝が千たび申しつるはこゝ候、こゝ候。」と、忿りけれども、力及ばず。爲朝を勇ませむ爲にや、俄に除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎「これは何といふ事ぞ。敵既に寄せ來る、方々の手分をこそせられむずれ。只今の除目物騷なり。人々は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせむ、唯もとの鎭西八郎にて候はむ。」とぞ申しける。

安藝守清盛は二條河原の東堤の西に向つて控へたり。その勢の中より、五十騎許り先陣に進んで、押寄せたり。「此所を固めたま

合はぬ敵
柏原天皇　第五十代桓武天皇。柏原陵に葬る、よつて柏原天皇とも申す。
清和天皇　第五十六代。
六孫王　源經基のこと。清和天皇第六の皇子貞純親王の長子、故に六孫王といふ。
八幡殿　源義家。

ふは誰人ぞ。名のらせ給へ。かく申すは、安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人古市伊藤武者景綱。」「同じき伊藤五、伊藤六。」とぞ名のりける。八郎これを聞き、「汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しくなり下れり。源氏は誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎭西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け。」とぞのたまひける。

景綱「昔より源平兩家天下の武將として、違敕の輩を討つに、兩家の郎等大將を射る事互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知られ參らせたる身なり。下﨟の射る矢、立つか立たぬか御覽ぜよ。」とて、よつ引いて射たれども、爲朝これを事ともせず、「合はぬ敵と思へども、汝が言葉の優しきに、矢一つ賜らむ、受けて見よ。」とて、三年竹の節近なる

射向の袖

舌を振ふ

金澤の城 今秋田縣仙北郡金澤町にその遺趾が在る。

を少し押磨いて、山鳥の尾を以てはいだるに、七寸五分の丸根の箆中過ぎて箆代のあるをうち食はせ、暫し保つてひやうと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎はやにはに落ちて死ににけり。

伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に參つて「八郎御曹司の矢御覽候へ。凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ。」と申せば、安藝守を始めて、この矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは「彼の先祖八幡殿、後三年の合戰の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは『君の御矢に中る者、鎧・冑を射通されずといふ事なし。抑君の御弓勢を確に拜み奉らばや。』と、望みければ、義家、革よき鎧三領重ね、木の枝にかけて、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これより愈兵ども歸服しけ

明けなむず

澤瀉をどし

あるべうもなし

りと申し傳へて聞くばかりなり。眼前にかゝる弓勢も侍るに、あな怖し。」とぞおぢあへる。

かく口々に言はれて、大將宣ひけるは「必ず清盛がこの門を承つて向ひたるにもあらず。何となく押寄せたるにてこそあれ。何方へも寄せよかし。さらば東の門か。」とあれば、兵皆「それもこの門近く候へば、若し同じ人や固めて候らむ。唯北の門へ向はせ給へ。」と言へば、「さも言はれたり。今は程なく夜も明けなむず。然れば小勢に大勢駈け立てられむも見苦しかりなむ。」とて引退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂に、澤瀉をどしの鎧に白星の冑を着、二十四差いたる中黒の矢負ひ、二所籐の弓持つて、黃河原毛なる馬に乘り、進み出でて「敕命を蒙つて罷り向ひたる者が、敵陣こはしとて引返す樣やあるべき。續けや若者ども。」とて、駈け出でられけるを、清盛これを見て、「あるべうもなし。あれ

剛の者
かたかは破り
をこの高名
矢目

制せよ者ども。爲朝が弓勢は目に見えたる事ぞかし。過すな。」とのたまひければ、兵ども前に馳せ塞がりければ力なく、京極を上りに、春日表の門へぞ寄せられける。

此所に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行（これゆき）といふは、またなき剛の者、かたかは破りの猪武者なるが、大將軍の引き給ふを見て「さればとて矢一筋に恐れて、向ひたる陣を引く事やある。たとひ筑紫の八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通らじ。五代傳へて軍に遭ふ事十五箇度、我が手に取つても、たび／＼多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかゝぬものを。人々見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせむ。」とて駈け出づれば、「をこの高名はせぬに如かず。無益なり。」と同僚ども制すれども、元より言ひつる言葉をかへさぬ男にて、「夜明けて後に傍輩の、『いで八郎の矢目見む。』と言はむには、何とかその時答ふべき。されば日頃の高名も

一定
射させむず

失せなむ事の無念なれば、よし／＼人は續かずとも、おのれ證人に立つべし。」とて、下人一人相具して、黒革をどしの鎧に、同じ毛の五枚冑を猪頸に着、十八差いたる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黒鞍置いて乘つたりけり。

門前に馬を駈け据ゑ、「物その物にはあらねども、安藝守の郎等伊賀國の住人山田小三郎伊行、生年二十八。公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり。山賊・強盜を搦め取る事は數を知らず、合戰の場（には）にもたび／＼に及んで高名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや。」と申しければ、爲朝、「一定きやつは引設けてぞ言ふらむ。一の矢をば射させむず。二の矢を番はむ所を射落さむず。」と宣ひて、白蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、駈け出でて「鎭西八郎これにあり。」と名のり給ふ所を、元より引設けたる矢なれば、弦音高く切つて放つ。御曹司の弓

縫ひ様

かせがれ

鏃

手の草摺を縫ひ樣にぞ射切つたる。一の矢を射損じて、二の矢を番ふ所を、爲朝よつ引いてひやうと射る。山田小三郎が鞍の前輪より、鎧の草摺、尻輪かけて、矢先三寸餘りぞ射通したる。暫しは矢にかせがれて、溜る樣にぞ見えし、郎ち弓手の方へ眞逆樣に落つれば、鏃は鞍に留つて、馬は河原へ馳せ行けば、下人つと馳せ寄り、主を肩に引懸けて、身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て、いよいよこの門へ向ふ者こそなかりけれ。

次の文中の係結を説明せよ

「敵既に寄せ來る方々の手分をこそせられむずれ只今の除目物騷なり爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせむ」とぞ申しける

平治物語　三卷。作者未詳。平治の亂の顚末を記した軍記物語。

待賢門　平安城の東面の門。

重盛　平清盛の長子。

頼盛　平忠盛の第五子。清盛の弟。

教盛　清盛の弟。

六波羅　京都鳥部郷一帶の總名。清盛の邸宅が在つた。

一四　待賢門の戰

平治物語

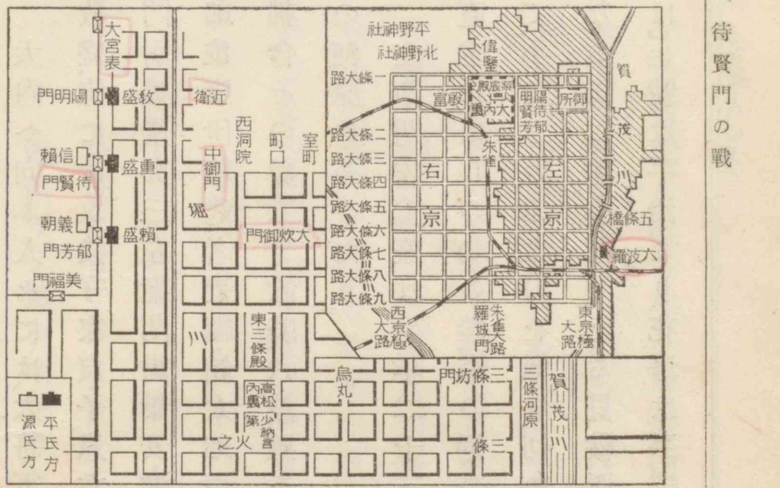
大内へ向ふ人々には、大將軍は左衞門佐重盛・三河守頼盛・淡路守教盛、侍には筑後守家貞・子息左衞門尉貞能・主馬判官盛國・子息右衞門尉盛俊・與三左衞門尉景安・進藤左衞門家泰・難波次郎經房・瀨尾太郎兼康・伊藤武者景綱・舘太郎貞康・同じき十郎貞景をはじめとして、都合その勢三千餘騎、六波羅をうち出でて賀茂川を馳せわたし、西の河原に控へたり。

左衞門佐重盛は、生年二十三、けふの軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、はじの匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の兜の緒を締めて、小烏といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黃桃花毛なる馬に、柳・櫻摺つたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛宣ひけるは、「年號は平治なり、花洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應

樊噲　沛公(漢の高祖)の臣。勇者。
張良　高祖を佐けて漢朝を建設した人。

せり。敵を平げむこと、何の疑ひかあるべき。誰かこゝに樊噲・張良が勇をなさざらむ。」とて、三千餘騎を三手に分けて、近衛・中御門・大炊御門、大宮表へうち出でて、陽明待賢郁芳門へ押寄せたり。

大内には三方の門を鎖し固め、東表をば開かれたり。承明建禮の脇の小門をもともに開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺・桐壺・紫宸殿の前後まで兵ひしとなみゐたり。



これ皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流うち立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流さし揚げて、勇み進める三千餘騎一度

穆王云々　周の穆王が八匹の駿馬を驅つて天下を周遊した事が「史記周本記」に見えてゐる。

に鬨をどつと作りければ、大内も響きわたりて夥し。鯢波(ときのこゑ)に驚きて、たゞ今までゆゝしく見えられつる信頼卿、顔色變りて草葉の如くにて南階をおりられけるが、膝戰いておりかねたり。人なみ〳〵に馬に乘らむと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乘り煩ふ上、主の心には似も似ず、逸りきつたる逸物なれば、つと出でむとしけるを、舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて、乘りかね給ふところを、侍二人つと寄つて、「疾く召し候へ。」とて押上げたり。餘りにや押したりけむ、弓手の方へ乘り越して、伏しざまにどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顔に砂ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日ごろは大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、「あの信頼といふ不覺人は臆したりな。」とて、日華門をうち出でて

惡源太 源義平。義朝の長子。

郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血押拭ひ、とかくして馬にかき乘せられ、待賢門へ向はれけるが、ものの用にあふべしとも見えざりけり。

左衞門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にて押寄せて、呼ばはり給ひけるは「この門の大將軍は信頼卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔太宰大貳淸盛が嫡子、左衞門佐重盛。生年二十三。」と名のり懸けければ、信頼返事にも及ばず、「それ防げ、侍ども。」とて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし。我先にと逃げければ、重盛愈勇みて、大庭の椋の木の下まで攻めつけたり。義朝これを見て「惡源太はなきか。信頼といふ大臆病人が、待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追ひ出せ。」と宣ひければ「承り候。」とて驅けられたり。續く兵には鎌田兵衞・後藤兵衞・佐々木源三・波多野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・長井齋藤別當岡部

清和天皇 第五十六代。

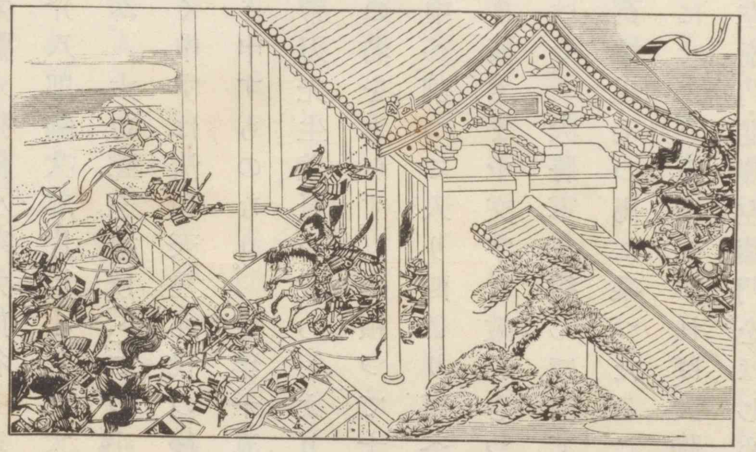
大藏 武藏國(埼玉縣)比企郡に在る。

目な懸けそ

六彌太・猪俣小平六・熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫以上十七騎、くつわを並べて馳せ向ふ。大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名のれ聞かむ。かく申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平と申すものなり。生年十五歳、武藏の大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしよりこの方、たび〳〵の合戰に一度も不覺の名をとらず。年積つて十九歳。見參せむ。」とて、五百餘騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追ひ廻し、縱ざま横ざま十文字に、敵をさつと蹴散らして、「端武者どもには目な懸けそ。大將軍を組んで討て。はじの匂の鎧に蝶の裾金物打つて黃桃花毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押並べて組んで落ち、手捕にせよ。」と下知すれば、大將を組ませじと防ぐ平家の侍ども、與三左衞門・進藤左藤門をはじめとして百騎許りが、中にぞ隔りける。

採うだりける

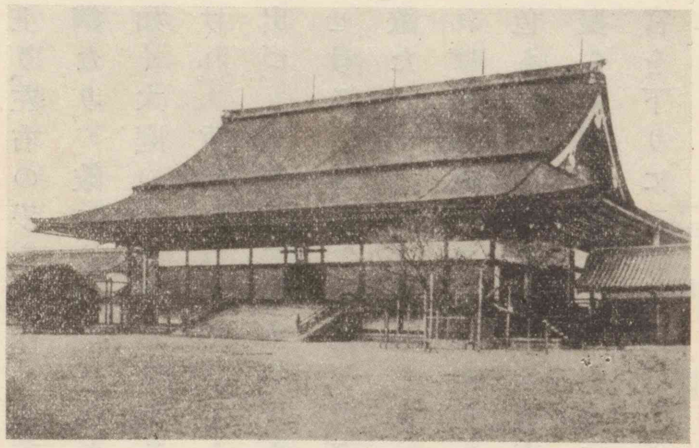
平將軍　平貞盛。



待賢門の戰（日本歷史圖繪）

惡源太をはじめとして十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭のむくの木を中に立て、左近の櫻・右近の橘を七八度まで追ひ廻して、組まむ組まむとぞ揉うだりける。十七騎に驅けたてられて、五百餘騎かなはじとや思ひけむ、大宮表へさつと引く。

大將左衞門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふところに、筑後守つと參りて、「曩祖平將軍の二たび生れ替り給へる君かな。」と向うざまに譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見



京都御所紫宸殿の左近の櫻・右近の橘

せむとや思はれけむ、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相倶して、また大庭のむくの木まで攻め寄せたり。　また惡源太驅け向ひ、見まはしていひけるは、「たゞ今向ひたるは皆新手の兵なり。　但し大將はもとの大將重盛ぞ。　以前こそ洩らすとも、今度に於ては餘すまじ。　押並べて組むで捕れ。　兵ども。」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難波次郎、同じき三郎・瀨尾太郎・伊藤武者をはじめとして、百餘騎が中に隔てたる

に事ともせず、惡源太弓をば小脇にかい挾み、鐙踏ん張り突っ立ち上り、左右の手を擧げ「幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平氏の嫡嫡なり。敵には誰か嫌はむ。寄れや、組まむ。」といふまゝに、先の如く大庭のむくの木の下を追ひ廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけむ、また大宮表へ引いて出づ。惡源太、二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝これを見て、須藤瀧口を以て「汝が不覺に防げばこそ敵たび〳〵驅け入るらめ。あれ速に追ひ出せ。」といひ遣されければ、俊綱馳せてこの由をいふに「承り候。進めや、ものども。」とて、色もかはらぬ十七騎、大宮表に驅け出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ「わが子ながらも義平はよく驅けたるものかな。あ、驅けたり。」とぞ譽められける。

笹川臨風　名は種郎。文學博士。國文學者。東京市の人。明治三年生。

小牧山　尾張國(愛知縣)東春日井郡に在る。天正十二年(二二四四)こゝで秀吉と家康とが戰つた。

千利休　名は宗易。千家流茶道の祖。

賤が岳　近江國(滋賀縣)伊香郡に在る。天正十一年(二二四三)こゝで秀吉と柴田勝家とが戰つた。

佐久間玄蕃　名は盛政。柴田勝家の臣。

一五 男性美

笹川臨風

何をか男性美といふ。

氣象の天空海闊なるにあり、勇快果斷なるにあり。秀吉曰く「我に謀叛するものはよもあるまじ。我ほどの主はあるまじきものを。」と。秀吉は男性美を發揮したる一人なり。彼の度量は大きく、胸は廣かりき。能く清濁併せ呑むの概ありき。小牧山の役、秀吉、千利休の茶會にあり。戰起ると聞くや、勇快果斷、そのまゝたち上り、尻をまくりて、えいや〳〵とて出陣せり。賤が岳の戰には、疾風迅雷の如く進軍し、須臾にして、金瓢の馬表、岳麓に現れ、佐久間玄蕃をして進退度を失はしめり。

男性は義侠心あるべきなり。然諾を重んじ、他人の急に走り、利害の打算以外に面白き氣象あらざるべからず。往時我が國に男

市井の徒

伊達といふものありき。多くは市井の徒にして、中には無賴漢もなきにあらず。その道德も偏頗にして、識見も高からざりしが、その勇氣ありて水火をも辭せざる底の心意氣に至りては、誠に欽すべきものありき。威武に屈せず、權貴を恐れず、自家の利益を犠牲にして他を濟ふの氣魄に至つては、また江戸時代の名物たるに恥ぢずと謂ふべし。

笹川臨風

男性は能く責任を知る。事を曖昧模糊に附するは男子の爲すべき所にあらず。人の臣としては、人の臣たる責任を知り、人の將たらば、人の將たるべき責任を知る。學生としては學生の責任を知り、子としては子の責任を知る。總べての人がみなこの責任を知らば、國運は隆々として旺んなるべく、社會の文化は駸々として進むべし。野球・庭球の如き、又漕艇の如き、各人その責任を知つてこれを盡すを以て、その遊技に統一あり興味あり。若し個々勝手の事を爲して、その責任を蔑にせば、到底行はるべきものにあらず。遊技には獨り責任を知りて、その他には責任を忘れんとするが如きは、思はざるの甚しきものなり。

男性の美なるは常に後暗からざるにあり。後暗きものはとかくに隱れんとし、左顧右眄して、敢て進まざるなり。男子は公明正大皎々として白日の如くなるべし。自ら潔きものは進むに勇あり、事を爲すに恐るゝ所なし。孟子曰く、「自反而不縮、雖褐寬博、吾不惴焉。自反而縮、雖千萬人吾往矣。」と。人誰か過なからん、過を悔ゆるが男らしき所にして、男性美の存する所なり。古聖人はいへり、「過則勿憚改。」と。また曰く、「君子過如日月食。」と。非を遂げ過を隱しおほせんとするは、畢竟自ら難地に踏み込んで、常に後暗

駸—浸

左顧右眄

古聖人　孔子をさす。

悔い。

彼の蒼たる云々　「彼蒼者天、曷其有ㇾ極。」（韓愈、祭二十二郎一文）

滄海の一粟　「眇滄海一粟。」（蘇東坡、前赤壁賦）

き思ひをなすものなり。過あらば直ちにこれを悔い、悔いてこれを改むるを勇ありとなす。過は日月の蝕するが如く、浮雲の翳すが如し。これを改むれば、また赫々として光明あり。男性美はその男らしきによりて現る。英雄といひ、偉人といひ、君子といふ皆男性美を發揮したるによりて、他の渇仰を受くるなり。

古の氣概あるもの、識見あるものは、自ら稱して大丈夫といへり。大丈夫とは、「ますらを」なり、男子なり、眞男子なり、最も能く男性美を發揮するものをいふ。自ら大丈夫と信ずれば、時に遇ふと遇はざると、運と不運と、皆問ふ所にあらず。自家が信ずる道に進み、その所信を貫徹するに於て、最も勇あり、斷あるなり。余は今の青年が常に自ら大丈夫を以て任じ、その男性美を發揮せんことを切望せずんばあらず。

彼の蒼たるものは天、我等が住める大地すら、既に滄海の一粟に

過ぎず。況や我が生の須臾なるに於てをや。然れども、その須臾なると、その滄海の一粟たるとは問ふを要せず。男性美は宇宙に於ける一奇觀なるべきなり。感化は永遠なり。男子の事業は悠久に亙りて渝（かは）らざるなり。我等は男と生れたるを誇とす。男にして男らしからずんば、寧ろ男たらざるに若かず。既に男として生れたる以上は、男性美を發揮せずんば、男としての生れがひなきなり。

男子としては眞男子たるべし、大丈夫たるべし、人の褌を以て相撲を取る勿れ。我が力を賴みとし、我が生の眞面目を發揮し、我が事業をして久遠の事業たらしめよ。一時は花の如し。永遠は果實なり、種子なり。

（男性美）

日本アルプス(槍ヶ岳)

田部重治　法政大學教授。富山縣の人。
上高地　梓川上流の盆地。穂高・燒・霞澤等に圍まれ全長十三粁、幅一粁の狹長なるＳ字形の區域。海拔一〇五六米。
穂高　海拔三一〇三米。

一六　上高地

田部重治

上高地溪谷の美を、形作つてゐるものを個々的に見る場合には、外に比類を見ないといふ形容は必ずしも與へられない。溪流として梓川ほどのものを他に見出すことは、さほど困難ではない。穂高に優る山は他にも見出すことが出來よう。上高地の森林も他に見出されぬほど深い程度のものではない。又溫泉も所謂溫泉と稱するものに比較すると、寧ろ劣つてゐる感がある。しかし全體として總括して見ると、これほどの條件を具備してゐるところはない。上高地と云へば渾然として美しきもの、凡べてを具へた、さながら自然の調和、自然の音樂と云つた風なものを想ひ起さざるを得ない感じがする。

上高地ほどすき透るやうな趣の深い綠、綺麗な流れ、鋭い氣高い

魅力

日本アルプス　歐洲のアルプスに因み英人ゴーランドが、初めてこの語を用ひ、ウエストンが歐洲に紹介したといはれてゐる。

山、柔らかい山、深林・溫泉・牧場等がよく調和され、渾然とした魅力を以て人に接するところはない。よく私達は上高地に匹敵しうるところとして日光の湯本を考へたことがある。しかし親しく雙方に暮して見て、雙方の自然を比較して見ると、矢張り私は比較にならぬほど上高地の方がすぐれてゐることを感ずる。

かう云ふ風に私は上高地をよいものとするけれども、日本アルプス中にあつて上高地がひとり孤立してよいと云ふのでは決してない。私達が上高地をよいと云つてゐる場合は、上高地を中心として考へるあたりの山岳・溪谷が悉くすぐれ、あたり一帶が大きなはてしない美はしい自然の一大地帶とも云ふべきものを形作つて、私達は無意識に其の代表者としての上高地を考へてゐるに相違ないと思ふ。

私は先づ上高地に行かうとする人、また上高地を味はうとす

槍ヶ岳 海拔三一八〇米。
霞澤山 海拔二六四六米。
燒ヶ岳 アルプス中唯一の活火山。海拔二四五八米。
德本峠 海拔二一三二米。
島々谷 梓川の溪谷をいふ。長野縣松本市から一五粁七。

る人に、單に上高地へ行つて、日本の最もよいところを見たと云ふことですますことなく、上高地附近の美はしいもの凡べてに觸れんことを希望する。さうでないと本當に上高地を理解することが出來ないやうに思はれる。何となれば眞に上高地を理解し賞讚する人の考へてゐる上高地は、槍ヶ岳や穗高を込め、霞澤山を入れ、燒岳を含め、德本峠を考へ、島々谷をすらも入れて、其等を個々として切り離すことの出來ないものとして見てゐるからである。

槍ヶ岳

さうするには、單に上高地へ梓川の河畔に沿うて自動車で上り、また自動車で戻るやうでは、到底、上高地を理解することが出來ない。少くも上高地を鑑賞する爲には、自動車で梓川を通ることを一度やるにしても、一度は島々谷から德本峠に上り、そこから穗高山を仰ぎ、それから梓川の溪谷に入つて上高地溫泉に行くのが本當の順序であらうと思はれる。島々谷をじり〳〵登り、そこの溪谷や森林を味はひつゝ德本峠をよぢ、そこから穗高山を見ることが上高地の美を味はふことの最も大きな要素であることを忘れてはならない。

上高地を見て感ずることは、此處で見る山の姿が舊い型の山を見て讚美する人にとつても、また新しい登山家にとつても、何れも美はしいと思はれる山の多いことである。例へば、上高地溫泉から見た霞澤山の如き割合に人が登らないけれども、誰でも讚美する秀麗な姿を有し、又、穗高山の如きは誰でも讚美しないでは居ら

大正池

れないほど崇高なものであり、槍ヶ岳の鋭峯の美はしいことは云ふに及ばず、焼岳の如きも趣多いものである。

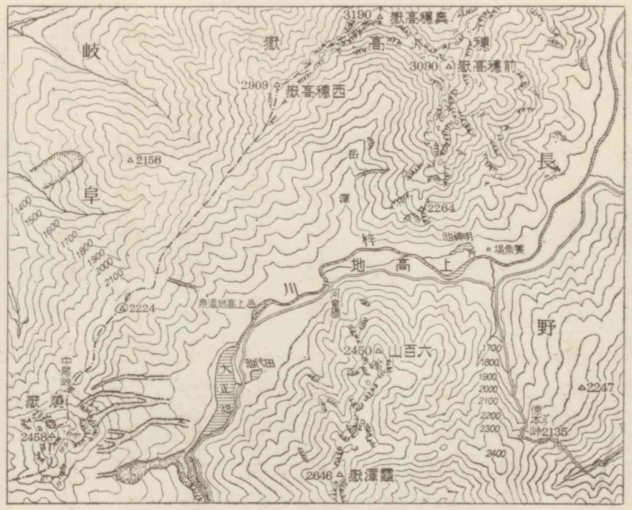
　此の山は日によつては平凡に見えるけれども、晴天の朝の五時頃に、大正池のほとりまで歩いて、よく觀察して見ると、流石に立派なものである。そして是等の山々には槍ヶ岳を除いては、一日で溫泉から往復することが出來ることは有難いことと云は

なければならない。

　上高地には美はしい池が幾つかある。大正池・宮川ノ池・田代ノ池等が其等である。此の內、大正池は大正になつて焼岳の噴火のために出來たもので、梓川を自動車で通る時には自然に見られるが、年々、形が變化して、今は殆ど出來た當時の美はしいものではなくなり、田代ノ池も大したものではない。しかし宮川ノ池だけは流石に行つて見る價値がある。こゝは上高地溫泉から約一里ほど槍ヶ岳へ行くやうにしてから、河を渡ると、穗高の麓にある。形は大きくはないが、美はしい針葉樹の間にある神祕的な感じのする池で、錘のやうな重い沈默をもつて、靜な大自然の中に收つてゐる。そして此の沈默を破つて時鳥が盛んに鳴いてゐる。

　更に又、上高地を考へると、二つの型の自然が上高地に接近して殆ど上高地の一部をなしてゐることが分る。そして或意味に於

燕　岳　海拔二七六三米。
乘　鞍　海拔三〇二六米。
御　嶽　海拔三〇六三米。
中房溫泉　硫黃泉。有明山の西麓に位し海拔一六三六米。溪谷の美、奇岩・名瀑を控ふ。



て上高地が其の中間にあるといふことが出來る。一つは、明るい雪とか高原とかいふものを聯想させる上高地以北の日本アルプスの光景であり、も一つは、暗い暗鬱な樹木の茂つた感じのする方面で、日本アルプス中でも比較的南によつてゐる方面である。一つは槍ヶ岳から燕岳へかけての方面及び槍ヶ岳から越中方面の山々を想ひ起させ、も一つは乘鞍や御嶽方面を想ひ起させる。私は此の兩方面を味はふための最も簡單なコースとして、一方には中房溫泉から常念山脈を越えて槍ヶ岳に登り、そこから上

大天井岳　海拔二九二二米。

高地に來り、他方には上高地から白骨溫泉に至り、そこから乘鞍岳に登ることをすゝめたい。何となれば、是等の方面は上高地と結びついて上高地一帶の美を形作るものであり、之なくしてはあの雄大なる地帶の美はしき全一性を無くするから。

普通に登山する人でも、中房溫泉から燕岳に登り、大天井岳から槍ヶ岳の殺生小屋に出て、次に槍ヶ岳に登攀してから上高地に來り、そこで靜に休養して德本峠を越えて歸るか、或は梓川河畔を自動車によつて歸るのが常である。けれども上高地からあの黑々とした寂しい森林を通つて平湯溫泉或は白骨溫泉に行つて、そこから乘鞍岳に登ることを餘り人はやらない。しかし私は是等の溫泉へ行くことが既に非常に趣が深く、最も人間味に豐で、上高地附近を眞に知らんとするには訪れなければならないところであると感ずる。そして平湯から乘鞍に登り、白骨に降ることも、或は

蝶ヶ岳 海拔二六六二米。

反對に白骨溫泉から乘鞍に登り平湯に降ることも興味がある。特に森林美を味はひ溫泉に趣味をもつ人は、此の地方に足を踏み入れる必要があらう。よく上高地の森林美をのみ說く人はあるが、それは乘鞍の森林を知らない人であり、一たび乘鞍の雄大なる森林にはいり、乘鞍の雄大なる裾野を味はひ、そこの大きな白樺の美はしさを味はつた人々は、上高地のそれは遙に規模の小さいことを感ずるであらう。

さうなると上高地附近を本當に味ははんとするには、最初は少くも德本峠を越え、そこから穗高を仰いで見る必要があり、次には中房溫泉から槍ヶ岳を通つて上高地に降り、白骨溫泉或は平湯溫泉に拔けなければならない。そしてそれから、追々範圍を廣めて、槍ヶ岳から穗高岳を縱走するのもよければ、常念山脈をもつと範圍を廣めて大天井岳から常念岳へそして更に蝶ヶ岳へと縱走す

安房山 海拔二二一九米。

概念的

るのもよく、槍ヶ岳から西鎌尾根を通り笠ヶ岳へ拔けるのも面白く、そして蒲田溫泉に下つて更に上高地へ還るのも興味がある。又、更に梓川のほとりの中ノ湯から安房山を越えて乘鞍岳に登ることを試み、或は乘鞍岳の裾野を色々と探つて見ることも面白い。

是等は上高地を中心とした一帶を考ふる際に、私達の頭の中に浮ぶ上高地的な美を形作るものの輪郭であるが、たゞそれだけで滿足するならば上高地のもつてゐる美はしさを一つの概念的なものとして輪郭的にのみつかまうとする恐れある故に、私達は上高地を一層、內觀的に見、上高地を靜に鑑賞し、上高地の美はしい內容的なものを味はふ必要がある。それにはやはり畫家の如き鑑賞の眼をもつて、あたりの自然を仔細に觀察しなければならない。それには一日二日の滯在では充分ではなく、數日間玆にゐて自然の色彩の一日々々の變化を見なければならない。

さう云ふものを見たいと思ふ人は、河童橋附近にさまよつて、奥穂高の山容が朝夕の太陽の光線や雲によつてうける變化や麓の白樺や落葉樹を心ゆくほど觀察するのもよい。梓川の流れに俯瞰して美はしい水の色に魂を洗ふのもよい。溫泉宿から霞澤山をながめて其の岩や木が、如何に配合よく此の秀麗なる山姿を形作つてゐるかを見るのもよい。宮川ノ池のほとりにさまよつて、其の神祕的な幽寂な感じを心ゆくほど味はひ、時々、時鳥が、此の幽寂を鋭く破る聲に心を奪はれて見るのもよい。また燒岳から穂高にかけての黑々とした幽林に、一種の心強さを體驗するのも惡くない。河童橋附近の柔らかい庭園的な光景の內にさまよつて、あたりの木立の心からすき透るやうな綠の色彩に深く見入るのもよい。又八月の候、上高地でも暑いと思ふ日中に夕立が來る時、此の溪谷を一面に包む綠を其が洗つたあとの美の如何にすがすがしく、其の美はしさが平地で見てゐるものとは違つて若々しいのを見るのもよからう。又上高地牧場の大きな要素となつてゐる樹木の美はしさが、如何に異國的情調をもつてゐるかを見るのもよい。

斯くして初めて私達は上高地及び其の一帶をよく鑑賞することが出來る。

上高地及び其の附近の與ふる感じは、最も完全なる、一つのむだもない、ゆとりのある溪谷のそれである。秀麗な山容、殘雪に輝く鋭峯、雄大な雪溪、焰の尖端のやうなうるはしい綠、深林、透明なる流れ、異國的情調をもつ牧場、清澄なる流れ、凡べてを貫く音樂的な調和、鋭い感じとなごやかな感じ、是等が渾然として形作る溪谷の感じが其である。

(紀行と隨筆)

國富信一 中央氣象臺技師。明治二十五年生。

普遍的

一七 夏の雲

國富信一

紺青の樣な海に浮ぶ眞帆・片帆を掠めて飛ぶ鷗、空には白い綿の樣な雲が、こゝかしこに漂うて居る。夏の空に無くてはならないのが、此の白い雲卽ち積雲である。此の雲は我々に一番親しみ深い雲で、夏の空ばかりではない。春でも秋でも冬でも、天氣さへ極上で、少しぽかぽかする樣な日には、いつも和らかに空に浮んで居る。油畫などに描かれて居る雲の大部分、又は子供の手すさびに描いた雲も、大抵此の雲である。此の雲が斯く普遍的になつた一原因は、前にも述べた樣に四季に亙つて何時も現れるといふこと、如何にも平和さうに見えること、眞白であることなどに加へて、其の形が略〻一定して居る事が注意せらるべきであらう。

積雲には形と規模の大小からいつて二種類ある。片々として白雲の團塊が其處此處に浮んで居るのが、單に「積雲」と呼ばれる物で、これは雲の厚みがやつと四五十米位、底面は遠くから見ると切り取つた樣に水平だが、上方は笠の樣に丸くなつて居る。明らかに、好晴の日に地面が熱せられた結果、それに觸れて居る空氣が上昇して冷却し、雲を生ずる結果である。元來暖かい水分を多量に含んだ空氣が上昇すると、上空へ行くに從つて氣壓が下るので、段段に膨脹する。膨脹すれば其の結果溫度は下る。所謂斷熱膨脹といふ操作に依つて冷却し、其の結果、其の空氣中に含まれて居る水蒸氣が凝結して水滴となるのである。であるから水蒸氣から水滴に移る高さ、卽ち雲を生ずる高さは、上昇して行つた空氣の溫度・濕度等に因つて定るもので、從つて同溫度にあつて同じ樣な度合に水蒸氣を含んで居る空氣は、同じ高さ迄上昇すれば、一齊に水蒸氣から雲に變る筈である。これが、積雲の下底面が略〻一定して、

切り取つた様な水平面を示す譯である。所で、上昇して行つた空氣はある高さで雲になつても猶上昇を續けてゆくが、これから先の上昇は、空氣が既に雲といふ我々に見得る姿となつて居るから其の有様が雲の形から判定できる。換言すれば、積雲の上部がむく〱として居るのは、上昇氣流の動く形を現したものに過ぎないのである。

積亂雲

積雲の第二種としては有名な積亂雲がある。これは一名を入道雲とか雷雲とかいつて、夏の午後などに現れる積雲の大規模のもので、高さも十粁位迄も上昇するものがある。さうしてその原因は頗る激しい上昇氣流に由るものと考へられて居る。

往年　大正十二年九月一日。

往年關東地方未曾有の大震災の時、東京及び横濱の空に異常な形をした奇雲が現れたのは、卽ち此の積亂雲であつたのである。つまり大火災のために起つた激しい上昇氣流が遂にあのやうな雲を構成するに至つたのであるが、あれだけの積亂雲が出來れば、普通ならば非常に激しい雷雨を伴はねばならない筈であるのに、當時少しも降雨を見なかつたといふのはどういふ譯であらうか。これはつまり上昇して行つた空氣中に含まれた水蒸氣量の關係である。つまりあの場合に上昇して行つた空氣は、火災のために乾燥し切つた空氣であつたので、上空で冷却しても纔に雲を生じたばかりで、降雨を生ずるだけに多量な水蒸氣を含有しなかつたのであつたと考へられる。

斯様に、積亂雲は局部的に異常に熱せられた空氣の上昇に由つて生ずるのであるから、火災などの場合は別として、通常盆地の様

杜甫
字は子美。唐の詩人。

陶潛
號は淵明。詩文に長ず。元嘉四年(西紀四二七)歿、年六十三。

夫木抄
夫木和歌集。三十六卷。鎌倉時代の歌人藤原長清の撰。

な特別に激しく熱せられさうな所に出來勝である。從つて積亂雲の生ずる場所は一定して居ると見ても差支ない。例へば東京の附近に出來る積亂雲は、多くは甲府の盆地、日光方面等から來るのに極つて居る樣なものである。

積亂雲は斯樣に出來る場所が略〻一定して居る上に、其の形が怪異であるために、頗る人目を引く。で、昔から入道雲・雲の峯として、詩歌にも俳諧にも非常に多くうたはれて居る。其の二三を擧げて見れば、詩には、

奇峯突兀火雲昇。　杜甫

夏雲多奇峯。　陶潛

などとあり、又歌には、

みなつきになりぬとみえて大そらに
あやしき雲の峯のいろかな　(夫木抄)

蕪村
本名は谷口寅。俳人。攝津國(大阪府)の人。天明三年(二四四三)歿、年六十八。

去來
姓は向井。芭蕉の高弟。俳人。長崎の人。寶永元年(二三六四)歿、年五十四。

其角
姓は寶井。芭蕉の高弟。俳人。江戸の人。寶永四年(二三六七)歿、年四十七。

芭蕉
本名は松尾宗房。別號は桃靑。俳人。伊賀國(三重縣)の人。元祿七年(二三五四)歿、年五十一。

大江丸
大伴氏。蓼太の門人。

とある。更に俳句には、

揚州の津も見えそめて雲の峯　蕪村

夕暮や禿げならびたる雲の峯　去來

八雲立つこの嶮嶬をくもの峯　其角

ひら〳〵とあぐる扇や雲の峯　芭蕉

など一々枚擧に遑がない位である。

又、入道雲の出來る所が一定して居る例としては、

先に立つ丹波太郎や道しるべ　大江丸

の一句が十分にこれを立證してゐる。茲に丹波太郎といふのは積亂雲の別名で、主として大阪地方で用ひられて居る。つまり大阪地方で見る積亂雲は、おもに丹波地方に出來る所から來たのであらう。

猶九州でいふ比古太郎、近江・越前の信濃太郎なども、やはり同樣

御來迎

な原因から來た雲の異名である。積亂雲には猶形から名付けられた別名も少くないので、播磨の「黒ぐも」加賀の「いたち雲」安房の「岸雲」なども異名同雲である。

積亂雲は前にも述べた樣に空氣の激しい上昇運動に由つて生ずるものであるが、非常に複雜な上昇徑路を取るために激しい渦動を生じて、あゝしたむく／＼とした形を示す一方に、猛烈な上昇運動のために水滴が帶電して、其の結果は雷を生ずる。雷雲の異名はこれに由つて來たのである。

日本アルプスでも、富士でも、少し高い夏の山の頂上に泊つた人は、誰でも氣付く事である。まだ御來迎には間もある頃に起き出でて、山頂から靜に眠る下界の模樣を眺める時、低く線を引いた樣に橫たはる白雲は微塵だに身ゆるぎさへせぬが、やがて御來迎の一閃と共に、此處彼處と眠れる谷々から、先づ白雲の躍動が始まつ

雲の八重垣

て來る。それが日の昇るに從つて激しく、遂にはわが足下をめがけて迄も奔騰する雲が生じて來る。これが高く離れては、物凄きばかりに雲塊重疊と、今にも崩れ落ちんばかりの勢を見せて昇りゆく樣は、到底我等が描き筆に敍し得らるゝ所では無い。雲の八重垣とはこれをいふのであらう。この壯觀は、只登山者にのみ與へられる自然の雄大な繪卷物である。

然しあの突兀たる雲の峯の頂上が怒濤の如く崩れ落ちる時、下界にあつて見れば、其の頂は橫になびいて、貝の舌の樣になり、鐵砧の樣になり、はては滿天を蔽うて眞黒な亂雲となり、雹を降らし、雷を轟かし、夕立さへも降らすのである。（夏の科學）

大町桂月
　名は芳衞。文章家。高知市の人。大正十四年歿、年五十七。

仁者は云々
「知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。」（論　語）

十和田湖
　青森縣と秋田縣との境に在る。

中禪寺湖
　栃木縣の西北部、日光町の近くに在る。

蘆の湖
　神奈川縣箱根山に在る。

一八　水の風趣

大町桂月

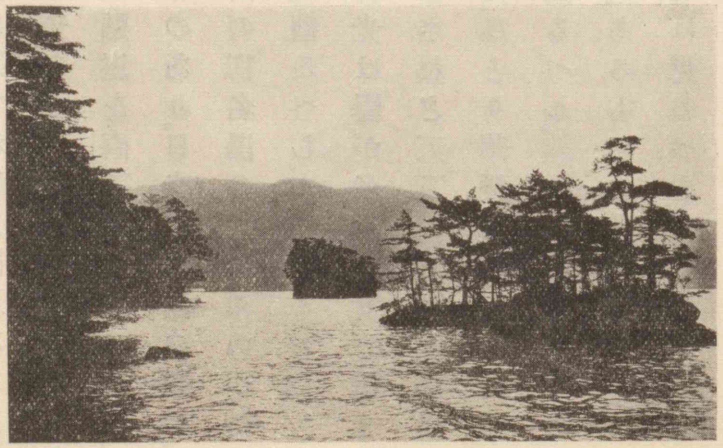
　仁者は山を愛し、知者は水を愛すとかや。山は靜なり、活動せず。故に單調なり。如何なる名山も、長くこれに對すれば厭かざるを得ず。たゞ雲煙浮動するによりて、山も活動するが如きを覺ゆ。雲煙は卽ち水の變體なり。山にのぼるに、水のなきものは平凡なり。富士山の如く、淺間山の如し。山、水を得てはじめて奇なり。日光山の如く、立山の如し。水はその活動して止まざる所に美の價値を有す。されどまたその靜なる所にも一種の趣味を有す。山中に於ける瀑と湖とは、この二種の美をあらはせるものなり。

　單に湖と云はずして山中の湖といふ。山中の湖とは、陸奥の十和田湖、日光の中禪寺湖、箱根の蘆の湖、富士北麓の山中・川口・精進・本栖諸湖の類なり。四面の山、浮世をさへぎりて、高低參差、影を湖上

羽化登仙
　蘇東坡の前赤壁賦の一句。

に落し、澄波一碧恰も鏡の如く、山の翠滴らんとして、水は碧瑠璃よりも清し。幽の極なり、靜の極なり。湖畔に踞して水に臨めば、感興何となく胸に涌く。夜色蒼茫の裡、湖心、月を印するにいたりては、更に一層の幽趣を添ふ。天地われに合するかと思はれ、われ天地に合するかとも思はる。羽化登仙するが如しなど言はんも、なかなかにおろかなり。

　これに反して、活動の美を盡せるものを瀑となす。一落千丈又萬丈、滾々瀉下するさまは、終日相對して



十和田湖

立山 富山縣の東南部に在る。

飽かず。夏觀るに最もよし。一度瀑に對すれば、人間夏あるを知らず。朝日に映じて虹霓を現ずるも奇なり。崖畔の樹木霜を帶びて紅葉すれば、觀更に奇なり。瀑に懸崖を直下するものあり、日光の華嚴瀑の如し。崖をつたはるものあり、日光の湯瀑の如し。二三段以上に折れたるものあり、立山の稱名瀑の如し。いづれもみな觀るべし。

華嚴瀑

日光は瀑が名物なりと稱せらる。されど天下の奇觀といふべきは、ひとり華嚴瀑のみ。湯瀑やや見るべし。霧降・裏見以下の瀑は、わざ〳〵行きて見るべき程の價値あるものに非ず。日光に限らず、すべて日本の諸瀑は、高さに於ては見るべきもの少からざれども、幅に於て見るべきものはこれなきやうなり。たゞ富士の白

おほへる

銀河九天云々 「飛流直下三千丈、疑是銀河落九天。」(唐の李白の詩)

絲瀑は幅百八間と稱す。半分はかけねなりとすとも、なほ五十間の幅あり。水、全壁をおほへるはその一部にて、數十百條相連りて水晶簾をかけたるやうなるも、亦天下の一奇觀たるを失はず。世

白絲瀑

に瀑といふ瀑は多けれども、華嚴と白絲とを見れば、先づ以て瀑を語るに足るべし。華嚴は幅數間なれども、五十餘間の長さあり。白絲は高さ六丈に過ぎざれども、幅は一町位あり。華嚴の瀑壺に下りてこれを仰げば、恰も銀河九天より落つる觀あるべく、その美は崇高の極なり。白絲の瀑壺につけば、玉簾の清風に搖ぐが如し。これは優美の趣を盡せり。憾むらくは、華嚴と同じくこれを日光に見ざることを。日光七十二瀑、數のみ多くして觀るべきものは

東照宮　東照大權現と稱する。德川家康を祀る。現今別格官幣社。

瀞八町　源を大臺ヶ原山に發する北山川が和歌山縣の國境を奔下するあたり約八町の間の溪谷。

寢覺の床　長野縣西筑摩郡駒ヶ根村。木曾川の急流に在る奇勝。

斷魚溪　島根縣江の川の上流。

少し。されど水の美はほゞ盡し得たり。

日光町の盡くる處、東照宮の杉林のはじまらんとする處、清流白玉を散らす大谷川の上に、朱欄の神橋縹緲としてかゝれり。やゝ上れば含滿淵あり。水と岩と鬪ふの一奇觀を呈す。深澤・馬返あたりの溪流、境幽にして水淸し。これより一里ばかりの山を上れば、天下の大瀑華嚴瀑直下す。瀑の上には中禪寺湖あり。東西三里南北一里、所謂山中の湖のやゝ大なるものなり。更に湖に注ぐ水を溯れば、龍頭瀑あり。湍としては傾斜急に、瀑としては傾斜寛なれども、亦一奇觀なり。この水の上、湯瀑となる。長さ華嚴にゆづらず、幅はむしろ華嚴より廣けれど、傾斜の面にかゝりて、華嚴の如き雄壯の觀なし。湯瀑は直ちに湯の湖となる。中禪寺湖を五六分したるに過ぎざれども、幽趣は却つてまされり。湖畔の溫泉、硫化水素の異臭を放てども、なほ滯留して詩思を養ふに足るべし。

富士川　山梨縣に發し、駿河灣に注ぐ、

最上川　山形縣に發し、日本海に注ぐ。

球磨川　熊本縣南部の川、八代海に注ぐ。

天龍川　長野縣に發し、遠州灘に注ぐ。

木曾川　長野縣に發し、伊勢海に注ぐ。

保津川　京都嵐山を流れる。桂川ともいふ。

千里の江陵　李白の「早發白帝城」の詩の一句。

耶馬溪　大分縣山國川の上流に在る勝景。

昇仙峽　山梨縣荒川沿岸に在る勝景。

日光四十八湖と稱す。されど中禪寺湖と湯の湖とにて、山中の湖の大觀を盡せり。こゝより更に白根をよぢ、五色湖を觀ずとも、神橋より溫泉まで六里の間に於て、靜水の美と動水の美とは絕えず見ることを得べし。

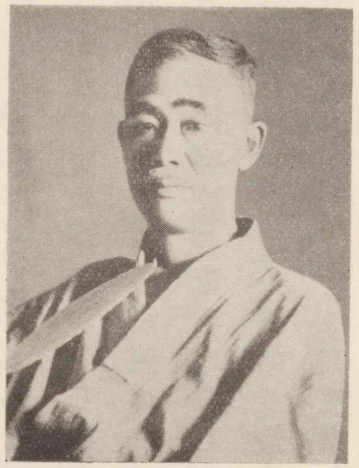
動水の美は瀑のみならず、溪あり、湍あり、急流あり、ゆるき流れあり、終に海となる。溪流の奇は靜にして熊野の瀞八町となり、激して木曾の寢覺の床となり、石見の斷漁溪となる。舟を下すべき急流に至りては、富士川あり、最上川あり、球磨川あり。これを日本三大急流と稱す。なほ天龍川あるべく、木曾川あるべく、保津川あるべし。一瞬に二三峯を送迎し、終に千里の江陵一日に還るの趣あり、溪と云ひ急流と云ひ、その美の一半は地形と巖狀とに待つ。耶馬溪や昇仙峽や、その奇景は巖の山にあれど、水なくんば大いに落寞たるべし。

（筆のしづく）

相馬御風　名は昌治。詩人。評論家。創作家。新潟縣の人。明治十六年生。

一九　生の味

相馬御風



相馬御風

　私達が食物をとるのは、私達の生を保たんが爲である。しかし、誰一人これを食はなければ生きて行かれぬからと思つて、その思ひに驅られて物を食ふものはない。そんな考へよりは、食ひたい欲望か、さもなければ飢ゑの苦しさが先である。

　大自然は私達を生かさんが爲に、私達に食慾を與へた。而もそれと同時にその欲望を滿足させた快さと舌に感ずる物の味の快さとを與へた。これは二重に感謝すべきことである。

　いかに食慾が堪へがたいからといつて、いかに飢ゑの苦しみが

熊の膽

激しいからといつて、またいかに命をつなぐに必要だからといつて、熊の膽のやうな苦いものを毎日朝から晩まで食つてゐなければならなかつたら、生きることとそのことほど不幸なことはあるまい。

　私達が食物をとるのは、生をつながんが爲であると同時に、それは快き味はひを得んが爲である。そこに私達の生活の貴さがある。單に生きんが爲に生きて行くのは、それはたゞ存在でしかない。私達の生活は生命の持續であると同時に、私達自身にとりての歡びの享受でなければならない。

　これはひとり食物のみに於てではない。私達の生の最も大切なつとめには、凡べて味はひが伴うてゐる。大自然は生々發展の爲のつとめに歡びを兼ね與へてゐるのである。

　自然は一面に於ては、私達が私達の額に汗して、私達を生かして

心の樂園

行くべき生命の糧を得べき又つくり出すべき苦しき仕事場である。

しかし、それと同時に、他面に於てそれは私達の心を樂しましめ、魂を悅ばすべき樂園でなければならぬ。

山や、野は、農人にとりて、苦しい働き場所であると同時に、美に充たされた樂園でなければならぬ。海は漁人にとりて、苦しい漁場であると同時に、美に充たされた心の樂園でなければならぬ。

しかし、若し山や野が農人にとりて、海が漁人にとりて、單に額に汗して働く爲のみの苦しい仕事場と化してしまつたらどうであらうか。

しかし、味はひは物にあるのではない。それを味はふ人にある。味はふ人の心にある。

家の中にごろ〳〵してゐて食ふ珍味佳肴よりも、山に登つて食

哲人

ふ乾からびた握飯が遙に美味であるやうに、凡べての物の味はそれを味はふ人の心にある。

百萬町歩の廣野を自己の所有としてゐる人でも、その人の心に自然を味はふ心がなければ、彼の所有してゐる地面の持つた自然の妙味だけでもその人のものたり得ない。一坪の地面すら所有してゐない人でも、その人の心が味はふ働きに充たされてゐるならば、世界中の自然美はその人の所有である。

いたづらに天下の名勝奇景を探し歩いてゐる人必ずしも、自然美を豊に味はつてゐる人とは云へない。心さへ働くならば、わが家の庭隅にある一叢の雜草にも、日々に新たなる情趣がある。心ある人にとりては一枚の木の葉にも、全宇宙が宿つてゐると古の哲人が云つたではないか。

外部に向つて常に新を求め、奇を追うてゐる人、必ずしも人生の

味はひに於て豐な人と云ふことは出來ない。寧ろ多くの場合彼等は、徒らに求めてゐるのみで、遂に何ものをも得ないあはれむべき人々である。彼等の多くは常に何ものにも歡びを見出し得ないが爲にこそ、絶えず次々に新を求め奇を追うてゐるのである。私達は絶えず外に向つて變化を求めつゝ、つひに何ものをも得ない生活よりも、あらゆるもののうちに常に新たなる歡びを見出し、平凡なる生活のうちに常に新たなる心を以て新たなる味を得ることを歡びたい。（人・世間・自然）

次の文より動詞・助動詞を選べ

イ、この雲がかく普遍的になつた一原因としては其の形が略ゞ一定してゐる事が注意せらるべきであらう

ロ、白絲の瀑壺につけば玉簾の清風に搖ぐが如しこれは優美の趣を盡せり

松平定信　田安宗武の第七子。磐城國（福島縣）白河の城主松平定邦の嗣となる。幕府の老中。樂翁といふ。文政十二年（二四八九）歿、年七十二。

二〇　道學ぶ人

松平定信

一

「かの人は雪・ほたる集めし窓に年を積みて、ふみ見る道に心をつくしはべるなり。されば世の中の事にはいと疎くはべり。」といへば「さるこそまことの道まねぶ人なりけれ。」と、ほめものするものもありとや。もとより道まねぶものは、五つのつね、五つのみちよりして人ををさめ、己ををさむる道まねぶよりほかの事はなし。されば世の事にさとく、今のあたりのみかは、千とせのさきつ世の事、見ぬもろこしのむかし今のさまより、さかりおとろふるきざし、人の心の上より、仕ふる道のくさ〴〵に至るまでも、明らかなるをこそ道まねぶ人とはいふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とはいふべからむ。

あらむかし

顏氏

「人足所履不過數寸。爲其傍無餘地故也。」（顏氏家訓）

二

或翁に「かの人はいかなる人にか。」と問へば「いとよき人なり。」と答ふ。「彼は」といへば「よき人」といふ。必ず彼をば惡しきといはむを選びて尋ねみるに「よき人」と答ふ。「いかなることぞ。」と尋ねしに、「人を見るには、まづ十にして五つばかりもよき事あるは、いとよき人と見るべし。十にして一つ二つもよき事あるはよき人なり。十にして皆惡しきをば惡しきと心得給へ。」といひしとぞ。こは人をかく見るなり。われを見るの道ならず。善きも惡しきも、かろきと重きとのわかちもあらむかし。

三

道路は足底の廣さだにあらば歩むべしといふは、例のことわりのみなり。いかで歩むべからむ。梁の上を歩まば落ちぬべし。こはかの顏氏のいひたる餘地なきなり。あまりに事に甚しく物にせちなれば、行はれぬのみか、うとまれぬべし。こは事物にたいして餘地なきなりと聞きぬ。

おもてにかきす

「其猶正牆面而立。」（論語）

四

目しひしものの、人のいひ難き事をもいふは、色も見えず、氣色にも知らねばいふなりけり。くらき人はわが惡しきも見えねば、善しと心得て人に恥ぢざるは、目しひし人のたぐひなり。されば古よりおもてにかきするなどともいふめり。

五

理なきが理のまことなり。理のごと行はるゝものならば、何の難きこともあらじを、さも知らで人とあらそひ、政を譏りなどしてたかぶるものは、理のまことを知らぬとやいふらむ。

六

「禍福は、組み合ふ繩のごとなる事は、もとより知る事なり。もろ

得まほし

こしの古書の世々の亂るゝあとを見給へ。いといたうめでたしといふ所より、亂るゝ端を爲すものぞ。」といひしは一言ながら心とゞむべき事とや。

七

我惡しきをば桀紂を引きてなだめ、人の善きをば堯舜を引出でてとがむ。「かれはかゝる惡しき事なしぬ。」といへば、「げにさあらむ。」といふ。「このものかく善き事し侍りぬ。」といへば、「いかゞあらむ。訝し。」といふ。「げにも人は惡しき心あるものかな。」といへば、「善き名得まほしと思ふが故に、人の惡しきにてわが心をなだめ、人の善きをば妬むより出で來るなり。」といひし。

八

久方の空に任せて、わがさゝやかなるざえを用ひざれとはいへど、空に任するに深き心あるべし。星の光見ても、はや沖はあらき

知れれば

風吹き出でつ、このあたりへは、明日の晝つかた吹き來べしといふ事も知れれば、心して乘るを、空に任するとこそは言はめ。沖の風吹くも吹かぬも問はずして、今こゝの波平らかなれば、はや漕ぎ出でて行くを、空に任すとはいはじ。もの食ふものにてもあれ、すべて身を養ふ道をつくし、そのほどを愼みて後、生死を空に任すべきを、養ひの事は心とせず、たゞ己が欲りする事にのみ隨ひて、生死を空に任するといふ事もありぬべし。

次の文中の圏點を附したる助詞の意義を說明せよ

イ、一坪の地面すら所有してゐない人

ロ、心さへ働くならば一叢の雜草にも新たな情趣がある

ハ、道路は足底の廣さだにあらば步むべし

二　須賀の荒野

信濃なるすがの荒野をとぶ鷲の翼もたわに吹く嵐かな

賀茂眞淵

秋の夜のほがら〳〵と天の原照る月影に雁なきわたる

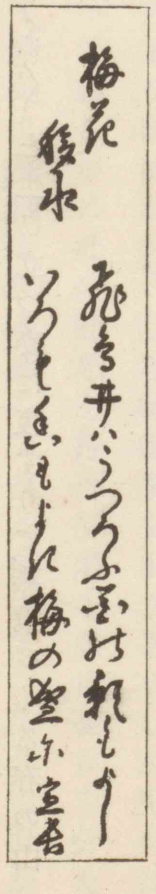
さし出づる此の日の本の光よりこまもろこしも春を知るらむ

本居宣長

賀茂眞淵　號は縣居。國學者。遠江國（靜岡縣）濱松市の人。明和六年(二四二九)歿、年七十三。

本居宣長　號は鈴の屋。國學者。伊勢國（三重縣）松坂市の人。享和元年(二四六一)歿、年七十二。

山ざくら花見る時はわがやどにあだし木草は植ゑじとぞ思ふ



本居宣長筆蹟

心あてに見し白雲は麓にておもはぬ空に晴るゝ富士のね

村田春海

なづな咲く花の匂に暮れかねて霞にのこる春のやま畑

梅花移水　飛鳥井はうつろふ花の影もよしいろも香もよき梅の盛に

村田春海　號は琴後翁。國學者。江戸の人。文化八年(二四七一)歿、年六十六。

香川景樹
號は桂園。歌人。鳥取の人。天保十四年(二五〇三)歿、年七十六。

橘　曙覽
歌人。田中大秀の弟子。越前國(福井縣)の人。明治元年歿、年五十七。

良　寬
俗名は山本榮藏。越後國(新潟縣)出雲崎の人。天保二年(二四九一)歿、年七十四。

てる月の影のちりくる心地して夜ゆく袖にたまる雪かな

香川景樹

歸るべく夜はふけたれど鴨川の瀬の音は清し月はさやけし

すく／＼と生ひ立つ麥に腹すりて燕飛びくる春の山畑

橘　曙覽

あしびきの山田の田井に鳴く蛙こゑのはるけきこのゆふべかも

良　寬

高山樗牛
名は林次郎。文學博士。文藝批評家。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。

惆悵

吳下の舊阿蒙

三　友に與ふ

高山樗牛

先頃より重ね／＼の御狀、身にしみ／＼と喜ばしく存じ候。春以來、此方よりははか／＼しき御返事も申さざりしが、兎角は病軀事に勝へず、審らかに此の愁思を抒べて君と共に憂ひを分たんと念へども、情迫り胸悶え、筆を落して文を成さず。何れの日か此の感懷を風露に托して、君と共に自然の中に優遊するを得ん。君よ、悲しきは吾等が身の上にて候ひけるよ。病は年と共に加はれども、信は獲難く迷ひは深し。徒らに惆悵して低回すれども、道遠くして日暮れなんとす。此の旦夕の命を以て、何れの時か色心相應の信徒となり、如說修行の行者となり得べき。再々の御狀、あゝ吾涙を以てそを繰返せしこと幾度ぞ。同じ惑ひに身を苦しめて、君は早くも解脫の道に就き給ひけれども、我は尙依然たる吳下の舊

沙を絞るに云々　諺に「沙を絞つて油をとるやう。」とあり、爲す能はざる喩。

瘖瘵

阿蒙、力めて書を讀み道を尋ぬれども、見思の惑ひ旦暮に積るのみ。所詮は沙を絞るに油なく、石を磨きて玉に似ざるか。あゝ吾また誰をか恨みん。

鎌倉に移り越し候うてより、早一年にも間近くなりぬ。東京へは去年の暮より一度も行かず、人にも世にも日に疎く相成申候。此の地も思ひの外の俗地にて、吾等が如き者の永く住まるべき所には非ざるにや。此の頃は駿河灣、清見潟の風光瘖瘵の間に往來致し、曾遊の感興今更の如く思ひ出され候。何れ此の秋頃には、かの地の客となるべきかと懸念致し居り候。病に罹りてより口に酒盃をつけず、此の世ながら禪房の中に等し。あゝ人生かくの如くにして何によりてか行樂せん。吾嘗て君に言ひおくりぬ、「君還り來まさば、願はくは一夕清見潟の海樓に痛飮し、其の夜滿腔の血一斗を吐いて死なん。」と。君よ、此の語矯に似て矯に非ず。吾は

臨風　笹川種郎の號。八五頁頭註參照。

松陽新報　鳥取縣松江市で發行する新聞。

時として、眞にかくの如く思ふ事あるなり。過ぐる頃、臨風宇都宮より三葉の新紙を送り越し候ひしが、開き見れば令弟潔君が主筆たる松陽新報にして、中に君が潔君に與へし私信を掲載しありき。あゝ吾は其の君が私信を讀みて、一種の感慨に打たるゝを禁ずる能はざりき。君は此の書の末に我が事に言ひ及び、かの「清見潟に快飮して滿腔の血一斗云々。」の我が言葉を引きて、「嗚呼これ病に苦しめる憐むべき我が友の聲ぞかし。予は此の友の顏を、或は此の世にて見得ざるべきかを思へば、斷腸の思ひに勝へず。」と書き給へりき。あゝ我が友よ、君もしか思ひ給ふか。今日まで君に明らさまに言ひしことは無けれども、吾も亦此の如く思うて日夕憂苦しつゝありしなり。唯幸にして病尚太だ重からず、力めて生を養ひ神を勵まさば、尚殘生の君と共に樂しむべきものあらんか。唯旦暮藥餌に親しみて、坐臥すべて意の如くならず。此の如くに

野州　下野國（栃木縣）に屬す。
湘南　相模國（神奈川縣）の南部鎌倉・小田原一帶の地方。
磊塊

してよしや百歳の壽を保つとも、一夕の歡會にも慣せざるを思ふと雖も、尙且此の生の戀々として捨て難きものあるを覺ゆるぞ是非も無き。君よ、弱きはげに人の心なりき。

忘れもせず、三年以前の八月二十二日のことなりき。君と臨風と吾と、船を同じうして遊び暮し扇が浦の一夜をば。あゝ此の三たりの友の相會して、かゝる遊びを再びすることは此の世にて望み得べきことなるか。今や臨風野州に下りて、吾は湘南に客となりぬ。彼は身世の匆忙に處して優遊の暇を得難く、吾は病軀を携して動き難し。あゝ吾何によりてか此の磊塊を吐かん。來らん年の秋には君歸り來まさんも、かゝる歡會の再びし難く、往時の忘れ難きを思へば、轉た人生遭逢のはかなきを傷まずんばあらざるなり。あゝ君よ、笑ひ給ふなかれ。弱きはげに人の心にて候ぞかし。

（樗牛全集）

姉崎嘲風　名は正治。文學博士。東京帝國大學名譽教授。宗教哲學者。京都市の人。明治六年生。
友　高山樗牛をさす。
君が西航云々　明治三十三年の三月のこと。

二三　忘れ難き日

姉崎嘲風

姉崎嘲風

嗚呼、忘れ難きこの日よ。憶へば早五年の昔、春光うらゝかに南風薰ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは恰も今日のこの日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上・艇中相隔りては、面も定かならず、姿も終には見分かぬまでに消え失せぬ。「健在なれ。」「再び早く相見ん。」との別離の言葉はなほ耳に響きつゝ、最後の握手なほ掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗飛びかふ海の面は渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りぬ。

嗚呼、かくて相別れたる友、今何處ぞ。

「君が西航の首途を橫濱に送りたる日、予は西の方、函嶺を越えて

清見潟　今興津町の南。清水港の古名。

有渡の山　清水市の西南方に在り、一名を久能山といふ。東照宮を以て有名である。

袖師の松原　興津町の西方に在る。

埋骨の地　清水市不二見に在る龍華寺。

駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて別離の悶を遣りたりき。その夜、月明らかに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に凭りて靜に君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。」これ我が友の寄せたる書信の一節なり。

月は去り日は逝きて、今日のこの日、我は彼の嘗て宿りし海樓に在れど、彼は已に世を謝して、我獨り孤影蕭然として欄に凭る。微雨蕭々、一灣の風光濛として夢に似たり。人生遭逢のはかなきを歎じたる彼、今や我をこの世に殘し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。

心を痛ましむるこの夕、有渡の山影かすかに、袖師の松原雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の裏に包まれて、海面亦死せるが如く、欄下渚邊に寄する浪の音かすかに訪づる。この海、この地、これ彼が久戀懷慕のところなりき。この夜、この風光、これ彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔のまゝにして、その月その日は玆に還り來り、彼が友は已に歸り來つれども、その人とその姿とは今や尋ぬるに由なし。昨は、彼が墓邊に、櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫で、今夜五年前の今日のこの日の別離を偲びて、彼が遺文に對す。嗚呼、我この流轉の世に處し、この友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。この夜、この風光、ひたすら思慕の深く、恨の長きを加ふるを如何せん。人生何ぞ舊に依りて落寞たるの甚しきや。別離の悲しみ何ぞ獨り悵として盡き難きや。

されど、徒らに憂ふるを已めよ。人に千歲の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却つて懷慕の樂しみを深からしめ、懷慕は時と處との隔りを越えて神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薰新たに、我が思

流轉

平生云々 「姉崎嘲風に與ふる書」といふ樗牛の文の中に見える句である。

墓日毎に彼に通ず。清見灣頭、今宵、雨しめやかにして、夜靜なり。形は見えねど、彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲また時に款晤に入り來る。嗚呼、平生憂ひを同じうするもの、君と予と先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異り、生死幽明を隔つといへども、彼と我と百世億劫常に相伴はん。

歳月流れ去つて五年の昔を今に返さん由なきも、神相接しては生死路相隔てず、三世一心の中に融け來つては、彼も我も人相異らず、靈相同じ。

人里には燈火已に影を收め、清見潟の山海また眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ。有渡の山下、友の墓邊に風靜なれ。而して、我は我が友と相語りつゝ、今宵一夜の睡に入らん。

（停雲集）

黑岩涙香 名は周六。文學者。評論家。高知縣の人。大正九年歿、年五十九。

二四 感化の力

黑岩涙香

一代の生命が次代に傳はると共に、感化も亦次代に傳はる。蓋し、感化は意志の力にして、或は生命よりも強し。人は肉體に於て死すとも、感化に於て死せざるなり。

朝に生れて夕に死する嬰兒あり。彼は眞に死したるか。曰く、必ずしも死せず、感化に於て活く。彼や此の世に亡しと雖も、其の姿は愛らしき面影と共に母の胸中に棲めり。其の母眼を開けばかれ母の眼前に浮び、眼を閉づれば夢寐に入るにあらずや。之を無意味なりと思ふなかれ、感化力の實體は此の者なり。此の者の有るが爲に、母の心が影響を受くるは幾ばくなるを知るべからず。或時は之が爲に慈悲の心を發し、或時は同情の涙を濺ぎ、身に對し、人に對し、結果より結果を生じて、其の影響綿々として盡くること

須らく――期すべし

豹は死して云々
「豹死留皮、人死留名。」（歐陽修）

無し。嬰兒猶然り、況や嬰兒以上をや。自己は須らく感化を以て永存せんことを期すべし。兒ある人が我が兒を感化する時間は、兒無き人が廣く同胞を感化する時間たるべし。

人は人を感化せんと勉むるのみが感化の手段なるに非ず。日常の一擧手一投足・一顰一笑、總べて感化力あり。故に何人も常に思はざるべからず、自己其の者が感化力の中心點にして、間斷無く感化力の波を八方に發射しつゝあることを。

吾人は生命に於て一體の生命と繋がり、感化に於て社會一體の思想と繋がる。吾人は生命に於て不死なり、感化に於ても亦不死なり。豹は死して皮を留め、士は死して名を遺す。是吾人の受けたる教訓なり。然れども名を遺すは小事のみ、唯感化を遺すを大事と爲す。今日の吾人は、過去一億年來の代々の感化力の爲に今日の吾人たるなり。吾人の新たに得たる所のものは、また感化と

して後に傳へざるべからず。古の聖賢死して百千年を經るも、今猶吾人の理想に入り、吾人を鼓舞し、吾人を奮發せしむ。感化は實に物質以上の力なり、靈氣なり。

吾人は自己の生命の短きを恨むべからず。人生の五十年は十二分の長時間なり。古來聖賢の死後千歳を照すが如き赫灼の偉動は、必ずしも五十年に渉らず、十年なるもあり、五年なるもあり、短きは單に分秒時の決斷のみ。嗚呼、身命の長短は言ふに足らず、吾人はたゞ當に感化の力を以て不朽なるを勉むべきのみ。人生は吾人に生命一體の向上主義を教へ、向上主義は吾人に須らく斯くの如くなるべきを命ず。生命を離れて人生なく、人生を離れて個人なし。個人豈眼を自己以上に放ち、自己以上の歸趣を以て自己を指導し、自己を以て自己以上のものに盡すことを爲さずして可ならんや。人生の意味は明白に是なり。

（天人論）

本居宣長 一二六頁頭註參照。

とりまかなひ なりぬるから。

いみじき

二五 師の說

本居宣長

一 新たなる說（ときごと）を出すこと

近き世、學問の道ひらけて、大かた萬づのとりまかなひ、さとく賢くなりぬるから、とり〴〵に新たなる說を出す人多く、その說よろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、いまだよくもとゝのはぬほどより、われおとらじと、よに異るめづらしき說を出して、人の耳をおどろかすこと、今の世のならひなり。その中には、ずゐぶんによろしき事も、まれには出でくめれど、大かたいまだしき學者の、心はやりていひ出づる事は、たゞ人にまさらむ勝たむの心にて、かろ〴〵しく、まへしりへをも、よくも考へ合さず、思ひよれるまゝに、うち出づる故に、多くはなか〳〵なるいみじきひがごとのみなり。

うけばる

なづまざる

師 賀茂眞淵をさしていふ。

おほかんめり

なはゞかりそ。

すべて新たなる說を出すは、いと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでも行きとほりて、たがふ所なく、動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時には、うけばりてよしと思ふも、ほど經て後に、いま一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

二 師の說になづまざること

おのれ古典（いにしへぶみ）を說くに、師の說とたがへること多く、師の說のわろき事あるをば、わきまへいふことも多かるを、いとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これすなはち、わが師の心にて、常に教へられしは、「後によき考への出できたらむには、必ずしも師の說にたがふとて、なはゞかりそ。」となむ教へられし。こはいとたふとき教にて、わが師の、よにすぐれ給へる一つなり。

ひたぶるに

大かた古を考ふること、さらに一人二人の力もて、悉くあきらめつくすべくもあらず。又よき人の説ならむからに、多くの中には、誤もなどかなからむ、必ずわろき事もまじらではえあらず。そのおのが心には、今は古のこゝろ、悉く明らかなり、これをおきてはあるべくもあらずと思ひ定めたることも、おもひの外に、また人の異るよき考へも出でくるわざなり。あまたの手を經るまに〳〵、さきざきの考へのうへをなほよく考へきはむるからに、つぎ〳〵にくはしくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて、必ずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、學問の道には、いふかひなきわざなり。

又おのが、師などのわろきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者その説にまどひて、長くよきを知る期なし。師の説なりとして、わろきを知りながら、いはず

むねと
えしも
ななづみそ

つゝみかくして、よさまにつくろひをらむは、たゞ師をのみたふとみて、道をば思はざるなり。宣長は、道をたふとみ、古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならむことを思ひ、古の意の明らかならむことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかけむことをば、えしもかへりみざることあるを、なほわろしと、そしらむ人はそしりてよ。そはせむかたなし。われは、人にそしられじ、よき人にならむとて、道をまげ、古の意をまげて、さてあるわざは、えせずなむ。これすなはち、わが師の心なれば、かへりては師をたふとむにもあるべくや。そはいかにもあれ。

三 わがをしへ子にいましめおくやう

われにしたがひて物まなばむともがらも、わが後に又よき考へのいできたらむには、必ずわが説にななづみそ。わがあしき故をいひて、よき考へをひろめよ。すべておのが人を教ふるは、道を明

おいらか

らかにせむとなれば、かにもかくにも、道を明らかにせむぞ、吾を用ふるには有りける。道を思はで、いたづらに吾をたふとまむは、わが心にあらざるぞかし。

四 一むきにかたよること

世の物知り人の、他の說のあしきをとがめず、一むきにかたよらず、これをもかれをもすてぬさまに、論ひをなすは、おほくはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいかにそしるとも、わが思ふすぢをまげて從ふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。

大かた一むきにかたよりて、他說(あだしときごと)をばわろしとゝがむるをば、心せばくよからぬ事とし、ひとむきにはかたよらず、他說をもわろしとはいはぬを、心ひろく、おいらかにてよしとするは、なべての人の

まめごころ

心なめれど、必ずそれ、さしもよき事にもあらず。よるところ定りて、そを深く信ずる心ならば、必ずひとむきにこそよるべけれ。それにたがへるすぢをばとるべきにあらず。よしとしてよるところに異るは、皆あしきなり。これよければ、かれは必ずあしきことわりぞかし。然るを、これもよく、又かれもあしからずといふは、よるところ定らず、信ずべきところを深く信ぜざるものなり。よるところ定りて、そを信ずる心の深ければ、それに異るすぢのあしきことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ信ずる所を信ずるまめごころなり。人はいかに思ふらむ。われは一むきにかたよりて、他說をばわろしとゝがむるも、必ずわろしとは思はずなむ。

(玉かつま)

芳賀矢一　文學博士。元國學院大學學長。國文學者。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。

喬—高

二六　本居翁の遺蹟

芳賀矢一

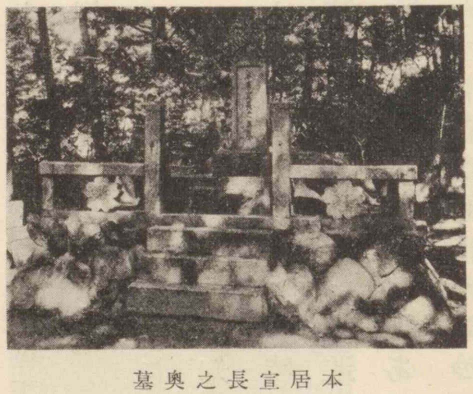
薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺めゆく樂しさ。早稻田はすでに刈りつくしたが、晩稻田は金色に波立つて豐年の喜びを見せてゐる。一里以上の路を往復するらしい一年生ぐらゐな小兒の連れ立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つてゐるまばらな小松原の道を通つて、やがて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。「あの山は何、この山は何「御墓はあそこの山の茂みの所です。」と車夫の語るのを聞きながら、いつしか山室に着いた。

車を捨てて爪先上りの坂道を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に馴れた目や耳には淸らかに珍しい。杉・松椎などで小暗い路をやゝ四五町も上つた所に、淨土宗の寺がある。妙

九十九折

平田篤胤　宣長の門人。國學者。羽後國(秋田縣)の人。天保十四年(二五〇三)歿、年六十八。

樂寺といつて、翁には深い關係のある寺である。それから右へ左へと九十九折を喘ぎ〳〵六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上、二三十坪ぐらゐが平地になつてゐる。その中央の小高い盛土が卽ち翁の墓である。上に櫻の木が一本。「本居宣長之奧墓」と題した墓石がある。山室山神社といふが、社殿も何もない。翁の墓の左手に圓い石があつて、平田篤胤大人の



本居宣長之奧墓

なきがらはいづくの土になりぬとも
魂はおきなのもとに行かなむ

と鐫つたのが立つてゐる。

額づく

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられたことはない。しかも數多の門弟子の中で、獨り翁の傍らにはべつてゐられるのは、さぞかし滿足なことであらうと思ふ。この墓所はかの妙樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して、生前に占定して置かれたのである。その承諾を喜んで、住僧に宛てられた手紙は、今なほ同寺で珍藏してゐる。

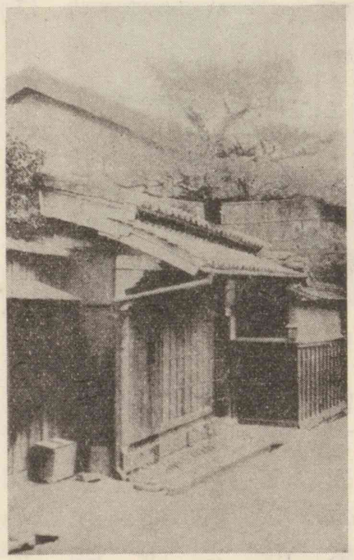
　やまむろの山に千年のやどしめて
　　風に知られぬ花をこそ見め

と詠まれたのはこの時である。二十年來、一日として翁の書物を讀まぬことのない後進の一書生が、今始めて翁の墓の前に額づいて、感慨は眞に無量であつた。

　百歳の世は隔つれど教へ子に
　　數まへませと拜み額づく

永劫

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。その著書の卓絶な學術上の價値と、偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人をつくりつゝあるのである。世に學者の事業ほど偉大なものはない。



本居翁舊宅

この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。青々とした伊勢の海を見はるかして、志摩・三河・尾張などの崎々・山々、近くは松坂町を眼下に見る。「富士の山もいつもはちやうどあのあたりに見える。」と、ホテルの主人は指さした。千古に卓越した偉大な學者の奥墓としては、まことにふさはしい場所である。

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などす

趾—跡

本居清造　宣長翁五世の孫、今の戸主。

る。こゝの眺望もまことに美しい。元來、翁の祖先の檀那寺で、翁はをり〳〵こゝに遊ばれたのである。

松坂へ歸つて城趾の公園に行く。こゝに鈴屋遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝで保存されてゐる。また新しい倉庫には、翁の自筆の草稿、遺愛のもの、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。

本居翁書齋

どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉・篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災の虞もあるから、保存會で、この舊城址の一角に移したのである。

しかし庭の樹木・置石まで、一切舊態を存するやう苦心したといふことで、本居清造といふ表札まで、そのまゝになつてゐる。臺所のかまども、井も、便所

ワイマール　ザクセン＝ワイマール大公國の首府。

ゲーテ　ドイツの最大の詩人（西紀一七四九—一八三二）。

シルレル　ドイツの詩人（西紀一七五九—一八〇五）。

も、舊のまゝの形が遺されてゐる。下が抽斗になつてゐる小さい梯子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段に繋がれて懸つてゐる（これは模造品で、本品は陳列庫に在る）。これが即ち翁が一切の著書の述作された場所で、この四疊半から日本全國を吹き靡かす風が舞ひ起つたのである。西向きの窓から差しこむ夕日は、さぞ堪へ難かつたらうと思はれて、この質素な家居のさまが、いよ〳〵翁の人格を大ならしめる。ドイツのワイマールでゲーテやシルレルの舊宅を見た時にもその偉大な事業と、その質朴な家居の狀態との對比をおもしろく感じたが、この鈴屋の遺蹟には一層その感を深うした。ゲーテやシルレルの舊宅を見た時は、日本にもかういふやうに、偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行されて、まづこれを翁の舊宅に見ることを得たのはまことに悅ばしいことである。

四望豁然

この公園は四望豁然パノラマを見るやうで絶景であるが、翁の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇。松坂町民の誇は、翁の遺蹟に越したものはない。城の大手門を出でて數十歩、縣社山室山神社がある。社殿瑞籬が神宮風の樣式であるのは、一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返り咲きをしてゐる。宿の主人の話に、先年東鄕大將の來られた時も返り咲きを見られて、「さすがに本居翁の鄕土故、櫻は一年中咲くのだらう。」といはれたといふことである。

さくら木にゑりし百千の卷々ぞ
風に知られぬ花にはありける

（筆のまに〳〵）

五十嵐力 文學博士。早稻田大學教授。國文學者。米澤市の人。明治七年生。

二七 國語の愛護

五十嵐力

こゝに獨立した一つの國があつて、其の國を其のまゝ維持して行き或は更に進んで一層立派なものに仕上げて行くについて、國民の愛護して行かなければならないものが澤山あるかと考へます。先づ第一には國體でありませう。ついでは國民が祖先から傳へられた淳風美俗でありませう。或は建築・繪畫・彫刻其の他の古藝術もありませう。或は山水其の他の自然美もありませう。或は又其の國の特產といふやうな天產物もありませう。其の他いろ〳〵の物がありませうが、國語といふもの――我々が先祖から傳へられ、思想傳達の機關として片時も缺くことの出來ない國語といふものも、國民の愛護しなければならない最も大切なるものの一つであらうと考へます。

片手落

エマソン　西紀一八〇三―一八八二。

人によつては、それほど國語に重きを措かないで、「我々の重んずべきは思想である。實體である。言葉は思想實體を現す一つの符牒形式に過ぎない。一種の表現方便に過ぎない。かゝる表現の形式や方便に骨を折るのは愚かな事である。」と考へるかも知れません。またさういふ人が實際かなり多くあるやうにも思はれます。しかしながら、これは片手落の理窟といふもので、事實に於ては、「表現即ち實體である。言葉即ち思想である。」とさへいつてもよいかと思はれます。少くとも表現が實體の半分であると位には考へることが出來ませう。アメリカの有名な詩人で哲學者であるエマソンは、「人といふものはたゞ半分だけが自分で、他の半分は自分の表現だ。」と言ひました。

我々が人から「汝は何ものぞ。」と問はれた時に、先づ思ひ浮べるものは、自分の現れたものでありませう。そして自分の姓名・職業・

詭辯

伊藤仁齋　名は維楨(これえだ)。儒者。寶永二年(二三六五)歿、年七十九。

芭蕉　一〇九頁頭註參照。

アッシジ　イタリーの都邑。フランシスの生地。

フランシス　西紀一一八二―一二二六。

資格・住所・事業等を以て答へるでありませう。自分自身の現れである姓名・職業・資格、乃至服裝・住宅・庭園・言語・文章・藝術等を除外して、何處に「我」といふものがありませうか。又國自身の現れである國土・山川・都會・田舍・諸制度・諸設備・諸藝術を除いて、何處に「國」といふものがありませうか。世の中には異を樹つ事を好む詭辯者があつて、よく「表現の樣式や外形などに支配されて堪るものか。衣服は寒暑が凌げれば澤山だ、言葉は思ふ事がいへれば澤山だ。」などと申しますが、事實に於て、內容と形式とはそんなに手輕に引離せるものではありますまい。伊藤仁齋は井戸浚(がへ)の場合にも袴を着けずには居られず、芭蕉は笠一蓋杖一本でなければ心が落ちつかず、アッシジのフランシスは敝れ衣に繩の帶を締めなければ安んじなかつたのです。そして其の袴姿・笠杖姿・繩帶姿に、彼等銘々の人物が最も鮮やかに、最も適確に現れて居ると思ひます。かう考へ

道元禪師　我が國曹洞宗の開祖。建長五年(一二五三)歿、年五十四。

ると、「表現卽ち實體」とまではいはないでも、「表現卽ち實體の半ば」と位はいつても差支へなからうと思ひます。

表現はかやうに意味の深いものであります。特に言葉について見ると、言葉は其の人の爲人を現す所以のものであります。其の人の人格嗜好を現し、また其の人の過去をも、現在をも、時としては未來をも現すものであります。從つて言葉は、自分に對し、又他人に對して深く大いなる影響を及ぼすもので、其の表現上の用意、嗜み次第で、自分の品格を高め、運命を開拓することも出來、また之によつて他人に好感を與へ、ひいては社會を利し、文化の向上に貢獻することも出來るのであります。「言葉」などいふといかにも小さい事のやうに聞えますが、事實は決してさうでありません。道元禪師は「愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。」と說いて居られますが、これは實に簡短な中に言葉の靈力を力強く道破した一句であると思ひます。

此のやうに言葉といふものは人間生活の上に大きな力をもつものである上に、國語といふものは先祖から傳へられた一つの寶物で、大切な財產でありますから、これを立派に維持して、成るべく豐富にし、善美にするのが子孫たるわれ〳〵の義務であります。又われ〳〵の言葉を立派に護り立てるのが、取りも直さずわれわれ個人銘々を立派にする所以であり、同時に國を輝かす所以でもあるのであります。それでは、大亂脈を極めてゐる現在の國語に對してはどうすればよいかといふに、大體四つの方針に歸するのでありませう。卽ち第一には、語法・文法に合つた、少くとも正しい言葉にする事、第二には、正しきが上に更にこれを美しく磨き上げる事、第三には、正しい美しいと云つても、自ら狹く限るといふ事では面白くないから、自分の本領基調をちやんと立てて、これに合し

得る限り成るべく多くの要素を取入れて、豐な姿のものに生し立てる事、第四には、豐な中に統一のあるものに發達させる事、此の四つで、此の標準により、我が國語を正しくし、美しくし、豐にし、纏まりのあるものにして、國民生活の有力な表現たらしめると同時に、又これによつて國民生活其のものを向上發展させてゆくことが必要であると思ひます。（國語の愛護）

次の文より助詞・助動詞を選び、かつ文中の係結を説明せよ

イ、よき考への出できたらむには必ずしも師の説にたがふとてなはゞかりそとなむ教へられし

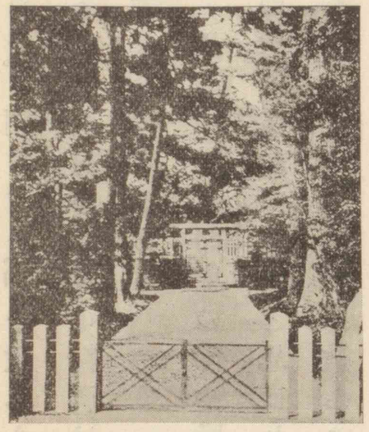
ロ、さくら木にゑりし百千の巻々ぞ風に知られぬ花にはありける

杉浦重剛　教育家。滋賀縣の人。大正十三年歿、年七十。

順德天皇　第八十四代。

二八　敬神

杉浦重剛



順德天皇御火葬塚（佐渡）

承久の亂に敗れて、畏れ多くも佐渡が島にお遷りになつた順德天皇は、

いざさらば磯うつ波にこと問はむ
沖の方にはなにごとかある

と悲傷なる一首をお詠みになり、都の空をなつかしみながら、御齡四十六歳にて崩御遊ばされた。天皇は御在世中、ことの外敬神の御心深く、禁祕抄といふ宮中の事柄を述べた本をお著しになつて、その中にも、「朝廷にはいろ〳〵の作法はあるが、神事を先に行ひ、他事を後に行ふ

神籬

こと。朝も夕も、神を敬ふ心を怠つてはならぬ。」と仰せられてゐる。我が日本國民の精神は、神を敬ふことを第一とするところに大なる特徴がある。

日本の神は、印度の佛や歐米の神とは違つて、前の時代に、實際この世に住んでゐたと思はれる祖先を神として祀り、崇拜するのである。それ故に神を敬ふことは、同時に祖先を敬ふことである。

人皇第一代神武天皇は、我が大八島國を統御するに先だつて、まづ神籬（ひもろぎ）を建てて神々を祀り、天富命と天種子命に命じて、祭祀と朝政を掌らしめ、人民に祭政一致の實例をお示しになつた。また御即位四年の春詔を下して「祖先の靈力により、今や大和を平定し、天皇の位に卽くことが出來た。こゝに祖先の靈を祀り、敬神と孝の道をつくさねばならぬ。」と仰せになつた。そして鳥見山で祖先の祭を行ひ、人民に敬神の實をお示しになつたのである。

御諡

蘇我石川麻呂　蘇我入鹿の從兄弟。

第十代崇神天皇は、その御諡にも知られるやうに、政治を行はせられるに際して敬神を第一とされた。或年、民間に傳染病が流行した時、天皇は三種の神器を、宮中に祀つてあることが天照大神の御怒に觸れたのではなからうかとの御懸念から、新殿を作つて神器を遷し、神々をお祀りして病の靜まることをお祈りなされた。

人皇第三十六代孝德天皇の大化元年は、我が國最初の年號の制定せられた記念すべき年であつた。天皇はこの機會に、新政の方針をお定めになつた。のみならず、その頃右大臣をつとめてゐた蘇我石川麻呂の申し出によつて、皇太子中大兄皇子や、中臣鎌足等とともに、天地の神々に對して、次のやうな御誓文を遊ばされた。

「蘇我氏の横暴も、祖先の御神力によつて止み、皇位は大地のやうに不動の基礎の上に定つた。今後は、上に二つの政治なく、下に二つの心を有する者はない。もしこの誓約にそむく者あらば、神は直

ちに天罰を降すであらう。」この誓をなされると同時に、人民に對しても「先づ神々の祭を行ひ、しかる後に天下の政治を議すべし。」と仰せになつたのである。

第四十二代文武天皇は、政治上の重要なる事柄を規定した大寶律令を發布された。時は大寶元年である。この規定によつて、京都にはいろ〳〵の役所が建造されたが、その中で最も重要なものは、神祇官と太政官であつた。神祇官は神々の祭を掌る役所であり、太政官は政治を掌る役所である。然るに神祇官の方が高い位にあつたことは、取りもなほさず、神を祀ることが國家にとつて、最も重要なことであるといふ趣旨から出たものに外ならなかつた。今日我が國の多くの神社の中に、官幣社といつて、祭の日には宮内省から供物を捧げられる神社がある。この官幣社といふ名稱は、その昔神祇官で名づけたものである。今日では神祇官がないか

石清水八幡宮　官幣大社。男山ともいふ。京都府綴喜郡八幡に在る。

ら、官幣社の事は、內務省がその任に當つてゐる。

第九十一代後宇多天皇の弘安四年、元の大軍が我が九州博多灣に攻めよせた時は、國民は上下ともに生色を失ひ、國家の上に一大危難が加はらうとしてゐた。その際、畏れ多くも龜山上皇は、御親ら京都の西南三里の所にある石清水八幡宮に御參拜になり、夜を徹して神々の加護をお祈り遊ばされた。その上勅使を伊勢大神宮に遣して、御自身の御生命と國難とをお取換へになるとまでお誓ひになつたのである。

明治天皇もまた、ことの外敬神の御心が深くあらせられた。慶應三年正月御踐祚あらせられて間もなく、德川十五代將軍慶喜公が大政を奉還し、王政復古となるや、如何にして新政を行ふべきか、日夜大御心を惱ませられた。そして廣く勤王の人々と計つて新政の方針を定め、これを明治元年三月、天地神明にお誓ひ遊ばされ

甲冑圖 正面

氷川(ヒカハ)神社 官幣大社。埼玉縣大宮町に在る。

御政始め

た。これが有名な五箇條の御誓文である。

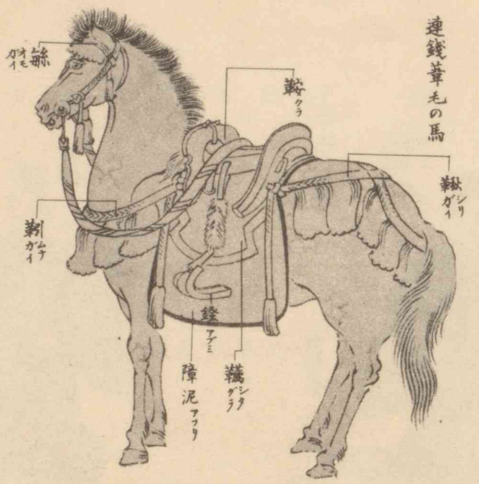
天皇はまた氷川神社を武藏の鎭守と定め、神靈鎭祭の詔や宣教の詔等をお下しになつて、御親ら敬神の實をお示しになつた。このほか、外國へ使臣をお遣しになる際には、必ずその使臣をお召しになつて宮中の八咫鏡を祀つてある賢所に奉拜させ、立派にその任務を果すことが出來るやう、神にお祈をせしめられたのである。

今日でも毎年一月四日の御政始めには、「先(ツ)奏(ス)伊勢神宮之事(ヲ)。」といふ事があるが、これは大寶令時代からの定めである。

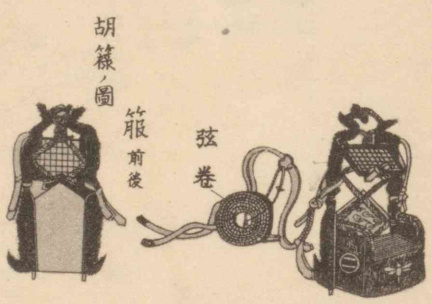
以上述べたやうに、我が國は昔から敬神の風が盛んである。この點では上下共に心を同じくし、神國としての礎石を固く築き上げてゐる。これが我が國の他國と異る最も著しい特徴であり、また我が國家の力の中樞をなすものである。

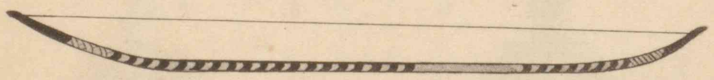
（國體讀本）

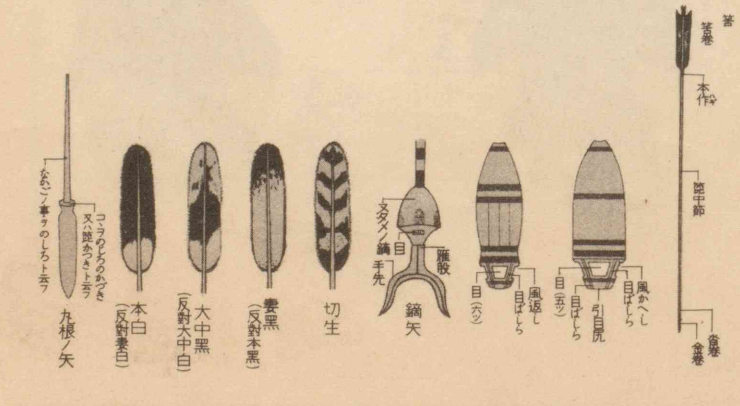
新制國語讀本 修訂版 卷五 終

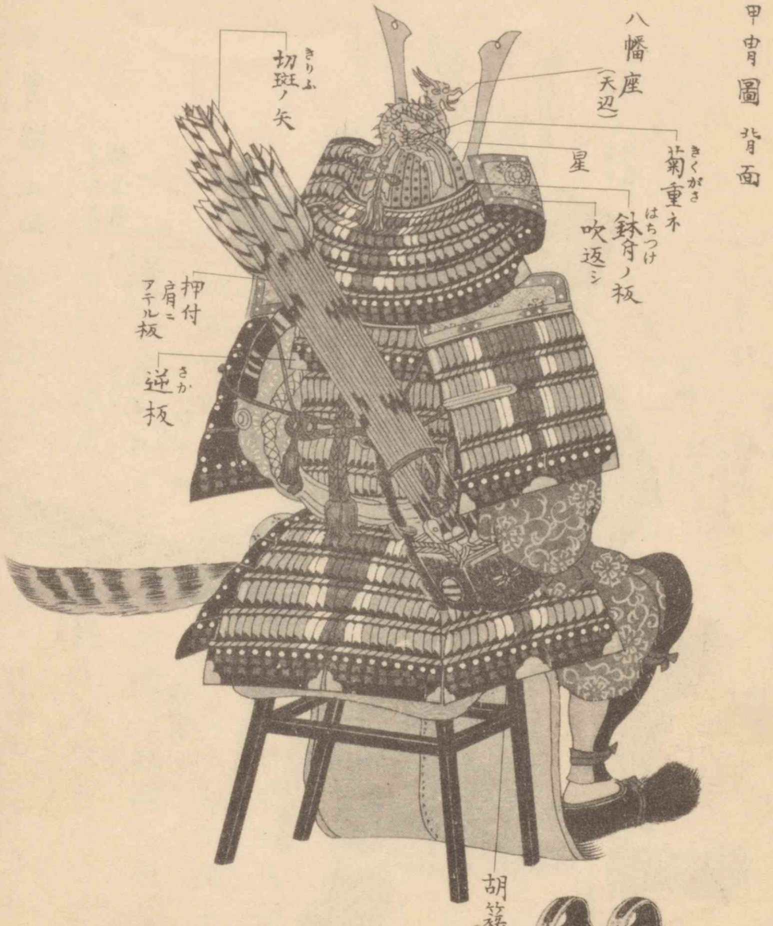

連錢葦毛の馬
鞍
鞦
鐙
障泥

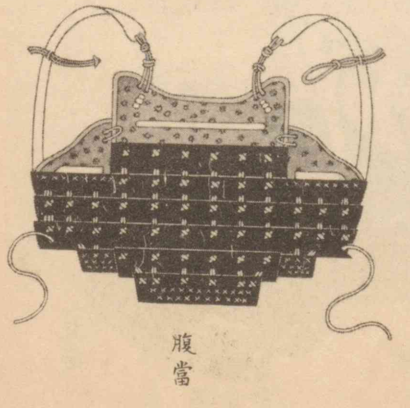
前輪
ヤマガタ
後輪
手形
シタグラ

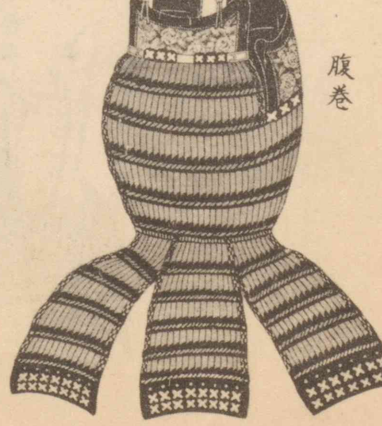

胡簶ノ圖
箙 前後
弦巻




なかごノ事ヲのしろト云フ
コヽヲのとろのかづき又ハ篦かつきト云フ
九根ノ矢
本白（反對妻白）
大中黒（反對大中白）
妻黒（反對本黒）
切生
ヌタメノ鏑
目
雁股
手先
鏑矢
目（六ツ）
目ばしら
風返し
目（五ツ）
目ばしら
引目尻
目ばしら
風かへし
筈
筈巻
本作
篦中節
沓巻
金巻


甲冑圖 背面
八幡座（天辺）
きりふ 切斑ノ矢
きくがさ 菊重ネ
星
はちつけ 鉢付ノ板
吹返シ
押付 肩ニアテル板
さか 逆板
胡簶


腹當


腹巻

文語助動詞連續法

	ラ變	四段	ナ變	上二段	上一段	下二段	下一段	カ變	サ變	體言
未然形につくもの	有ら	讀ま	死な	起き	着	受け	蹴	來(こ)	爲(せ)	花
(助動詞)	る す	る す	る す	らる さす	らる さす	らる さす	らる さす	らる さす	り らる さす	
(助動詞)	しむ む まし ず ざり じ まほし									
連用形につくもの	有り	讀み	死に	起き	着	受け	蹴	來(き)	爲(し)	花
(助動詞)	けん き(カ變・サ變は特例) けり つ ぬ(ナ變にはつゞかぬ) たり たし									
終止形につくもの	有り	讀む	死ぬ	起く	着る	受く	蹴る	來(く)	爲(す)	花
(助動詞)		べし べから らむ らし めり まじ なり(詠歎)								
連體形につくもの	有る	讀む	死ぬる	起くる	着る	受くる	蹴る	來(く)る	爲(す)る	花
(助動詞)	べし べから らむ らし めり まじ									
(助動詞)	なり(指定) 如し									
已然形につくもの	有れ	讀め	死ぬれ	起くれ	着れ	受くれ	蹴れ	來(く)る	爲(す)る	
(助動詞)		り								

動詞活用對照表

*「蹴ル」ハ國語ニテハ四段ニモ活用ス

口語

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段活用（カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ラ行）	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
	死	ナ	ニ	ヌ	ヌ	ネ	ネ
	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段活用（カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ行）	起	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ・キロ
	着	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ・キロ
下一段活用（ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ行）	得	エ	エ	エル	エル	エレ	エヨ・エロ
	蹴*	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ・ケロ
カ行變格	來	コ	キ	クル	クル	クレ	コイ
サ行變格	爲	セ・シ	シ	スル	スル	スレ	セヨ・シロ

文語

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段活用（カ・サ・タ・ハ・マ・ラ行）	書	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ
奈行變格	死	ナ	ニ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
良行變格	有	ラ	リ	リ	ル	レ	レ
上二段活用（カ・タ・ハ・マ・ヤ・ラ行）	起	キ	キ	ク	クル	クレ	キヨ
上一段活用（カ・ナ・ハ・マ・ヤ・ワ行）	着	キ	キ	キル	キル	キレ	キヨ
下二段活用（五十音各行）	得	エ	エ	ウ	ウル	ウレ	エヨ
下一段活用	蹴	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格	來	コ	キ	ク	クル	クレ	コヨ
サ行變格	爲	セ	シ	ス	スル	スレ	セヨ

（新制國語讀本卷三・四・五・六卷末附錄）

形容詞活用對照表

口語

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ク活用	高	○	ク	イ	イ	ケレ	○
シク活用	美	○	シク	シイ	シイ	シケレ	○

文語

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ク活用	高	ク	ク	シ	キ	ケレ	○
シク活用	美	シク	シク	シ	シキ	シケレ	○

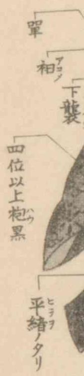
助動詞活用對照表

口語

種類	語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
受身	レル・ラレル	レ・ラレ	レ・ラレ	レル・ラレル	レル・ラレル	レレ・ラレレ	レヨ・レロ・ラレヨ・ラレロ
可能	レル・ラレル	レ・ラレ	レ・ラレ	レル・ラレル	レル・ラレル	レレ・ラレレ	
使役	セル・サセル	セ・サセ	セ・サセ	セル・サセル	セル・サセル	セレ・サセレ	セヨ・セロ・サセヨ・サセロ
尊敬	レル・ラレル	レ・ラレ	レ・ラレ	レル・ラレル	レル・ラレル	レレ・ラレレ	
指定	ダ・デス	ダラ・デセ	ダツ・デシ	ダ・デス			
	タ	タラ	タリ	タ	タ		

文語

種類	語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
受身	ル・ラル	レ・ラレ	レ・ラレ	ル・ラル	ルル・ラルル	ルレ・ラルレ	レヨ・ラレヨ
可能	ル・ラル	レ・ラレ	レ・ラレ	ル・ラル	ルル・ラルル	ルレ・ラルレ	
使役	ス・サス・シム	セ・サセ・シメ	セ・サセ・シメ	ス・サス・シム	スル・サスル・シムル	スレ・サスレ・シムレ	セヨ・サセヨ・シメヨ
尊敬	ル・ラル・ス・サス・シム	レ・ラレ・セ・サセ・シメ	レ・ラレ・セ・サセ・シメ	ル・ラル・ス・サス・シム	ルル・ラルル・スル・サスル・シムル	ルレ・ラルレ・スレ・サスレ・シムレ	レヨ・ラレヨ・セヨ・サセヨ・シメヨ
指定	ナリ・タリ	ナラ・タラ	ナリ・タリ	ナリ・タリ	ナル・タル	ナレ・タレ	タレ
	…・キ			…・キ	…・シ	…・シカ	



尊敬	指定	時	推量	打消	希望		比況
レル ラレル	ダ デス	タ ウ ヨウ	ラシイ マイ	ヌ ナイ	タイ		ヤウダ ヤウデス
レ ラレ	ダラ デセ	タラ					ヤウダラ ヤウデセ
レ ラレ	ダツ デシ	タリ	ラシク	ズ ナク	タク		ヤウダツ ヤウデシ
レル ラレル	ダ デス	タ ウ ヨウ	ラシイ マイ	ヌ ナイ	タイ		ヤウダ ヤウデス
レル ラレル		タ	ラシイ	ヌ ナイ	タイ		
レレ ラレレ			ラシケレ	ネ ナケレ	タケレ		

尊敬	指定	時	推量	打消	希望	詠歎	比況
ル ラル ス サス シム	ナリ タリ	キ ケリ ツ ヌ タリ リ ム	ラム ベシ ラシ マジ	ズ ザリ ジ	タシ マホシ	ナリ ケリ	ゴトシ
レ ラレ セ サセ シメ	ナラ タラ	テ ナ タラ	ベク マジク	ズ ザラ	タク マホシク		ゴトク
レ ラレ セ サセ シメ	ナリ タリ	テ ニ タリ	ベク マジク	ズ ザリ	タク マホシク		ゴトク
ル ラル ス サス シム	ナリ タリ	キ ケリ ツ ヌ タリ リ ム	ラム ベシ ラシ マジ	ズ ジ	タシ マホシ	ナリ ケリ	ゴトシ
ルル ラルル スル サスル シムル	ナル タル	シ ケル ツル ヌル タル ル ム	ラム ベキ ラシ マジキ	ヌ ザル ジ	タキ マホシキ	ナル ケル	ゴトキ
ルレ ラルレ スレ サスレ シムレ	ナレ タレ	シカ ケレ ツレ ヌレ タレ レ メ	ラメ ベケレ ラシ マジケレ	ネ ザレ ジ	タケレ マホシケレ	ナレ ケレ	
レヨ ラレヨ セヨ サセヨ シメヨ	タレ	テヨ ネ		ザレ			

口語助動詞連續法

	四段	上一段	下一段	カ變	サ變	體言
未然形につくもの	書か	落ち	捨て	來(き)	*爲(し・せ)	
	れる せる う	られる させる よう *まい				
	*ぬ *ない					
連用形につくもの	書き	落ち	捨て	來(き)	爲(し)	
	た たい ます					
終止形につくもの	書く	落ちる	捨てる	來る	爲る	
	まい					
	らしい					
連體形につくもの	書く	落ちる	捨てる	來る	爲る	花
	(の)だ (の)です やうだ					だ です (の)やうだ

音便

	い音便	う音便	撥音便	促音便
動詞	咲きて—い 防ぎて—い	問ひて—う	死にて—ん 飛びて—ん 富みて—ん	祝ひて—つ 持ちて—つ 知りて—つ
形容詞	青き海—い	甘くなる—う		

文語助動詞連續法

	ラ變	四段	ナ變	上二段	上一段	下二段	下一段	カ變	サ變	體言
未然形につくもの	有ら	讀ま	死な	起き	着	受け	蹴	來(こ)	爲(せ)	花
	る す			らる さす					り	
	しむ む まし ず ざり じ まほし									
連用形につくもの	有り	讀み	死に	起き	着	受け	蹴	來(き)	爲(し)	花
	けん き (カ變・サ變は特例) けり つ ぬ (ナ變にはつゞかぬ) たり たし									
終止形につくもの	有り	讀む	死ぬ	起く	着る	受く	蹴る	來(く)	爲(す)	花
		べし べから らむ らし めり まじ なり(詠歎)								
連體形につくもの	有る	讀む	死ぬる	起くる	着る	受くる	蹴る	來(く)る	爲(す)る	花
	べし べから らむ らし めり まじ									
	なり(指定) 如し									
巳然形につくもの	有れ	讀め	死ぬれ	起くれ	着れ	受くれ	蹴れ	來(く)る	爲(す)る	
		り								

昭和七年八月二十五日印刷
昭和七年八月二十九日發行
昭和八年一月十九日修正再版印刷
昭和八年一月二十三日修正再版發行
昭和十年七月二十九日修正三版印刷
昭和十年八月二日修正三版發行
昭和十年十二月四日修正四版印刷
昭和十年十二月八日修正四版發行

新制國語讀本修訂版

定價 卷一——卷六 各六拾錢
卷七——卷九 各五拾九錢
卷十 金五拾四錢

不許複製

編者 東條操

發行者 東京市神田區神保町一丁目一番地
株式會社 三省堂
代表者 龜井寅雄

印刷者 東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地
株式會社 三省堂蒲田工場
代表者 龜井豐治

發行所
株式會社 三省堂
（東京市神田區神保町一ノ一
振替口座東京三一五五五）
株式會社 三省堂大阪支店
（大阪市西區阿波座下通二ノ六
振替口座大阪八一三〇〇）